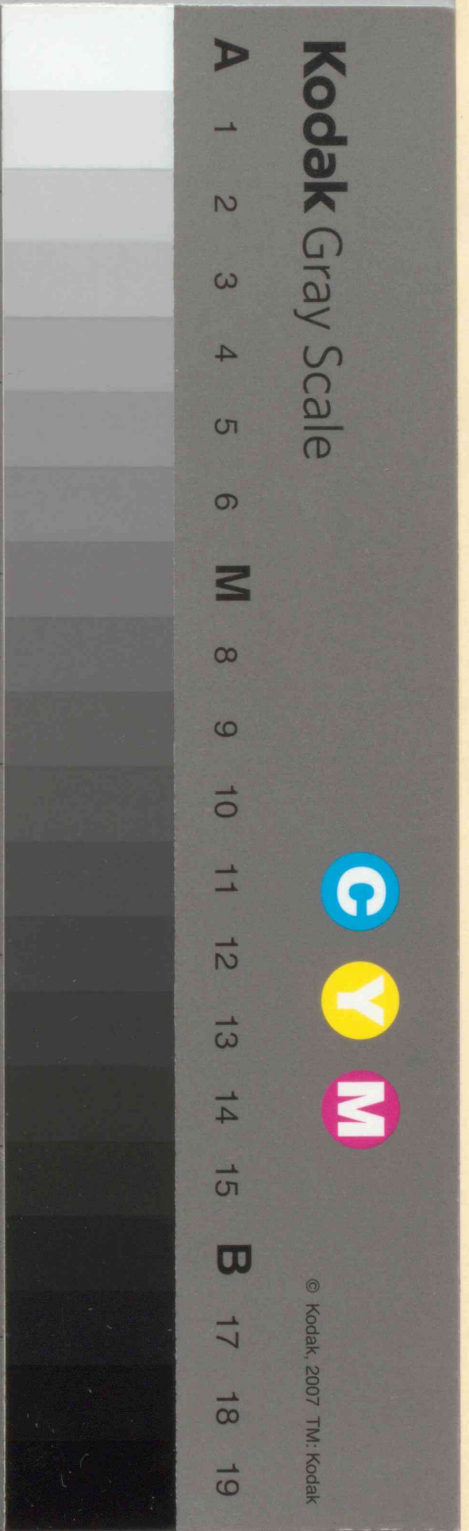


新編  
國文讀本  
新制版  
卷八

3759  
Se14  
資料室



42537  
教科書文庫  
4  
810  
44-1933  
~~20000~~  
~~34763~~  
200030  
2797





資料室

395.9  
Se14

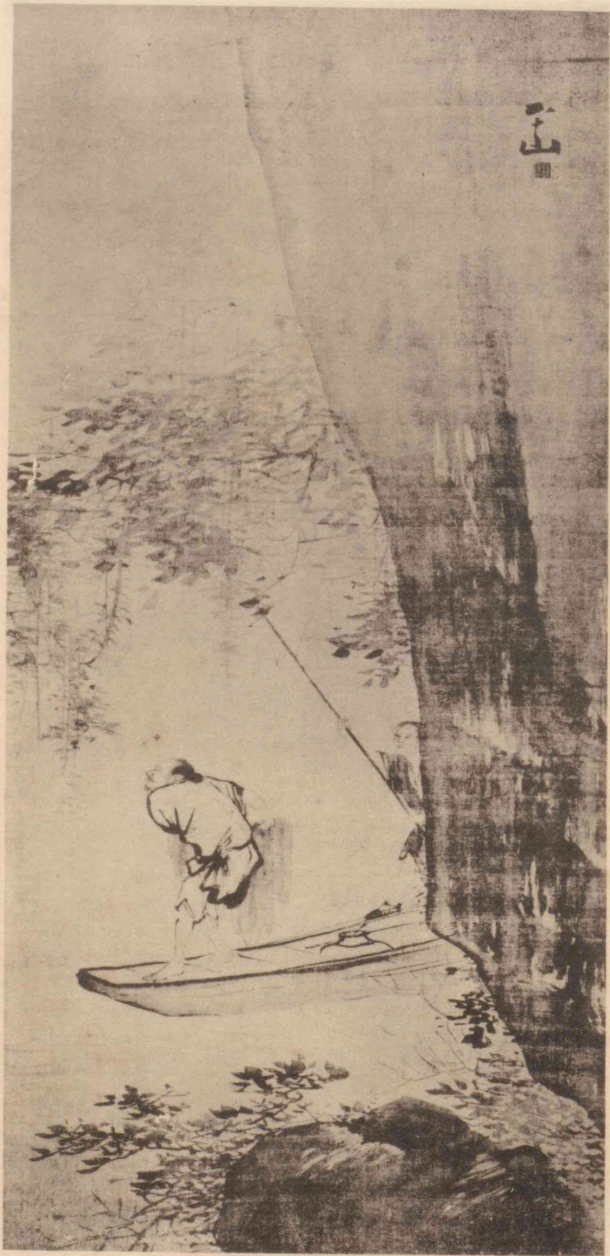
日六月一十年六和昭  
用科文漢語國校學中  
濟定檢省部文  
日六月七年八和昭  
用科語國校學業實

千田憲編

新編  
國文讀本  
新制版

東京  
右文書院藏版





漁父辭

張路筆

廣島大學  
圖書印





新編 國文讀本 新制版 卷八

目次

一 國民的自力主義	德富蘇峰	一
二 永生	高山樗牛	八
三 淺茅が原	「平家物語」	一三
四 作ることと見ること	岩城準太郎	一五
五 朝露		二〇
六 小品四篇		二一
一 里祭	伴 蒿 蹊	二一
二 山	同	二二

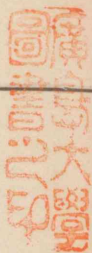


三	漁父辭	清水濱臣	二四
四	擣衣を聞く	同	二五
七	洛北大原村	佐佐木信綱	二五
八	扇の的	「平家物語」	三〇
九	塔影	河井醉茗	三四
一〇	芭蕉の臨終	沼波瓊音	三八
一一	梅津文鱗へ	寶井其角	四三
一二	元祿時代の文學	藤岡作太郎	四六
一三	千里が竹	近松門左衛門	五四
一四	奈須のしの原	源實朝	六二
一五	附子	「狂言二十番」	六五
一六	百蟲譜	横井也有	七五

一七	藪醫者	「柳樽」	七九
一八	四季のあはれ	兼好法師	八〇
一九	現代生活と古典	大類伸	八三
二〇	日本往古の圖書館	新村出	八六
二一	春寒し	夏目漱石	九八
二二	天の香具山	「新古今集」	一〇五
二三	劍難	中村吉藏	一一五
二四	鉢の木	「觀世流謠曲」	一二一
二五	言葉と聯想	佐々醒雪	一三五
二六	冬木立	炭太祇	一三九
二七	諺	藤井紫影	一四〇
二八	落花の雪	「太平記」	一四九



二九	方丈記	鴨	長明	一五四
一	行く川の流れ			一五四
二	地震			一五五
三	住みうき世			一五八
四	日野山の庵			一五九
三〇	かたみの壺			一六四



新編國文讀本 新制版 卷八

一 國民的自力主義

徳富蘇峰

徳富蘇峰  
名は猪一郎、  
熊本縣の人、  
貴族院議員、  
文久三年生。

日本帝國の運命は、日本國民の自力に據りて支持せられ、繼續せられ、開展せらる。吾人が自力主義を主張するは、畢竟我自ら我を恃む外に、方便も手段もあらざればなり。よし千百の方便手段ありとするも、その自力主義踐行の後に於て、始めて其の效用を見るべければなり。

然りと雖も、吾人の所謂自力主義は決して自滿主義にあらず、自足主義にあらず。何ぞ況や鎖國主義をや、排外主義をや。吾人は我が短を補ふべく、世界の總べての長を採らざるべからず。吾人



經綸

は飽くまで籠城割據の風を破りて、世界と歩調を一にせざるべからず。而もこれ唯内に自ら主持する所ありて、而して後、外に向つて之を求むべきのみ。

吾人は、我が國民が精神的に獨立し、而して後、世界的に協調せんことを望む。精神的の獨立とは何ぞや。日本國民は日本國民として、其の獨特の立脚地に於て、内外一切の經綸を定むることこれなり。東洋のドイツにあらず、東洋の英米にあらず、日本は東洋の日本としてなり、日本の日本としてなり。即ち我自ら我が固有の歴史的系統に則り、我自ら我が國民的見地に據りて裁斷を下すにあるのみ。此の如く、内既に支持する所あり、乃ち外に向つて其の益を求む、必ずしも英米と云はず、必ずしも獨佛と云はず、世界の長は皆採りて以て我が有と爲すべし。復何をか顧慮し、何をか遲疑せんや。

磨礪自彊  
進一轉

國際的葛藤

待つあるを待  
ます  
「用兵之法、  
無恃其不  
來、恃吾有  
以待也、無  
恃其不攻、  
恃吾有所以  
不可攻也。」  
(孫子)

惟ふに、我が國當今の憂は、第一、國民の惰氣滿々たることなり。別言すれば、國民猛志を消磨し、小成に安んずるにあり。曰く、日本は既に五大國の一に位せり。曰く、日本は既に東洋の盟主たり。曰く、日本は既に富強なり。と。而して更に磨礪自彊し、此の國運を進一轉せしむるを閑却しつゝあるなり。

第二、世界の大事を根本的に謬解したるにあり。曰く、世界は泰平なり。今後は戦争らしき戦争は絶無なるべし。國際的葛藤は聯盟によりて自動的に按排せらるべし。と。彼等は其の待つあるを待まず、其の來たるなきを待み、其の待むべきを待まず、待むべからざるを待むなり。

第三、我が日本帝國は世界に孤立せり。孤立といはんよりも多くの者より排斥せられつゝあり。是必ずしも日本國民の罪とのみ謂ふべからず。而も其の原因はいづくにあるにもせよ、事實は



昂む

苟安  
偷取

正しく此の如し。而して我が國民は、此の如き不愉快なる事實を正視し、認識し、之に處する所以の道を講ぜざるは何ぞや。

第四、我が國民は物質的に驕慢となり、精神的に萎縮せり。退いて自力の足らざるを慚ぢ、自國の缺陷を補ふことを昂めず、進んで世界に向つて自國の真相を闡明し、世界の誤解を正すことを努めず、唯その日暮しに一時の苟安を偷取しつゝあるは何ぞや。

第五、一寸の蟲にも五分の魂あり。如何に世界の迫害を被るとも、我が國民にして自ら道義的大自信あらば、何をか懼れ、何をか憚らんや。今日の憂は、日本帝國が世界的迫害の中心たるに非ずして、日本國民の道義的自信力の失墜にあり。

蓋し、吾人が自力主義なるものは、内に國民の道義的自信力を扶植し、先づ自ら不敗の地位を占め、而して後、徐ろに外に向つて我が志を行ふにあるのみ。此の如くして世界と協調を保つべく、此の

アングロ・サクソン

Anglo-Saxon.

角逐

如くして東洋の盟主たるべく、此の如くしてアングロサクソン民族と角逐して世界の文明に貢献し、大和民族の天職を全うするを得べきのみ。今日の如く、我が國民自ら信ぜずして他を信じ、自ら頼まずして他を頼み、放恣怠慢、強ひて自ら欺いて眼前を糊塗し去らんとし、此の如くして止むなくんば、我が帝國は精神的に死亡するなり。

痛楚號泣

世界の歴史は進歩の歴史なり、改善の歴史なり、向上の歴史なり。吾人は如何に一方に痛楚號泣するが如き現象を見るも、他方には光明と平和との到來を疑ふ能はざるなり。但し之を果さんが爲には、非常なる危険、非常なる艱難、非常なる苦痛を経ざるべからず。即ち今や吾人は此の一大試煉の時期に遭遇するものなり。當面の問題は、我が日本國民が果して之に及第するか否かに在るのみ。嘉永・安政の際に於て、我が日本は全く内憂外患の危機に擠され



危殆

苟且偷安

たりき。而も我が先人は種々の失敗過誤を累ねたるに拘らず、遂に之を排除して維新中興の新局面を打開せり。顧ふに明治百年に互れる國運の増進は、固より明治天皇聖徳の致す所なるも、亦嘉永・安政より元治・慶應に至る國歩の艱難によりて之を培養したるものと云はざるを得ず。人は艱難に生きて安逸に死す。國も亦然り。英佛兩國の現時に於て再生復活しつゝある所以、亦固より大戦の大試煉を経來たりたるが爲のみ。吾人は之を我が國の過去に徴し、之を英佛諸國の現在に徴し、我が帝國の前途に横たはる無數の危殆困難を豫想して、毫も自ら失望落膽せず。若し然るべき理由あらば、それは無數の危殆困難のものにあらず、寧ろこれに氣付かず、空々寂々、悠悠々々として、苟且偷安を事とする我が國民的精神の潰破これのみ。我が國民が自ら冒進するにせよ、はた回避するにせよ、何れにし

鐵石の心腸

イロ  
勝

ても我が國民的の一大試煉の時期は既に到來しつゝあるなり。此の上の問題は、果して國民的の一大決心、一大努力、一大奮闘もて之に打克たるべきかにあり。吾人は先づ我が國民が國運の消長興廢の十字街頭に立つことを自覺せんことを望む。次に此の國家的の一大危機に向つて勇進し、潔く此の一大試煉に及第せんことを望む。而もこれ決して容易の業にあらざるなり。吾人日本國民は、何れも國家的に大死一番して、而して後其の再生復活を期せざる可からず。如何に國家の難局を逃避するも、來たる可きものは遂に來たらざるを得ざるなり。吾人は寧ろ今日に於て之を覺悟し、鐵石の心腸もて之に當る決心なかるべからず。輕々しく其の趾を擧ぐる勿れ、漫に其の腕を扼する勿れ。忍ぶべきは忍べ、耐ふべきは耐へよ。只我が大和民族たるものは世界公論の容す所に據り、天下の大道を行ひ、國際共通の正義を旨とし、以て我が所信を遂



祕機

げよ。吾人は我が力を恃むとともに、我が正義を恃みとす。此の如くして與國の我を扶くるあらば、與國と共にすべし。苟くも與國なくんば、我躬ら往くべき道を往かんのみ。  
吾人は決して外患を恐れざるなり。若し眞に畏る可きものあらば、それは内憂にあり。内憂の中殊に畏る可きは國民的志趣の消磨にあり。知らず、我が國民は大死一番以て自ら新生命を贏ち得る覺悟あるか。活裡死あり、死中活あり。生を欲する者は死、死を敢へてするものは生。國家の前途を解決すべき祕機は、只此の死生の二字中にあり。

—「大戦後の世界と日本」—

## 二 永生

高山樗牛

高山樗牛  
名は林次郎、  
山形縣の人、  
文學博士、明

死は生きとし生けるものの免るべからざる運命なり。それ唯免るべからざる運命なり。故にまた避くべからざる問題なり。

されど世に生を惜しむ人はあれども、死を惜しむ人は少く、生に就いて慮る人はあれども、死に就いて考ふる人は稀なり。訝しからずや。

如何にして生くべきか、これ人生の大いなる疑問なり。されど如何にして死すべきかは、更に大いなる疑問にあらざるべきか。われ等は歴史を讀みて、大いなる宗教の起るを見たり。されど宗教とは生きんが爲の教にあらざりて、死せんが爲の悟なり。釋迦は人生の四苦に感じて、解脱の道を説きぬ。耶穌は同胞の宿罪を贖うて、永生の道を開きぬ。解脱や、永生や、死を外にして何の意義かある。最も賢き人の説ける哲學の旨趣も亦これに外ならざるなり。天地、人生の理法を明らかにするは、人をして安心立命の地を得しむるにあり。安心立命とはつまり死を安からしむるの謂にあらざりや。道德は現世の爲にのみ存するものにあらざり。名譽

治三十五年  
歿、年三十二。

解脱



究竟

の不朽を思ひ、事業の永遠を言ふは、これ即ち死後の世界を言ふなり。あはれその生を見て、その死を見ざるものは、人生の根本を遺れたりといふべし。死はすべての物の終にして、又すべての物の始なればなり。されば人々死を考へよ。死を考ふるは即ち人生

吾人は須らく現代を  
超越せざるべからず

高山林次郎

高山 楞牛 筆蹟

の目的を考ふるなり。如何にして生くべきかの問題は、即ち如何にして死すべきかの問題なり。死を考ふるは死滅を考ふるにあらずして、永生を考ふるなり。死は人生の究竟なるが故に、永生は人生の目的なり。かの生死の優劣を争ひ、人生の價値を疑ふものは愚なるかな。われ等は生を知り、いまだ死を知らず。如何ぞその優劣を知らん。人生の價値は絶對なり、他に比すべきものなし。厭世といひ、樂天といふ、われ等

實在

その何の意たるを知らず。われ等は唯人生の實在せるを知るのみ。

されば、われ等は生きざるべからず。永遠に生きざるべからず。死は萬物の運命なり。されど、われ等は死を超越してその永生を續けざるべからず。如何にせば死して生くるを得んか。人生究竟の問題こゝに集る。

涅槃

世に佛に願ひて涅槃の寂寞を求むるものあり。されど形骸を離れて魂魄なきを如何すべき。又その墳墓を壯大にし、金を鏤め、石に刻して、名の後世に傳はらんことを求むるものあり。されど時はすべての物の破壊者なり。風雨幾歳、時移り人渝り、滄桑幾度か變轉して、墓標ひとり全きを得べけんや。かくの如きは永生の道にあらざるなり。

まことの永生は、名によりて生くるにあらずして、事によりて生

滄桑 幾度  
桑田 滄海



ワット

James Watt

英國の人、蒸氣機關の發明者。(西曆一七六六—一八一五)

フランクリン

Benjamin Franklin

米國の學者、避雷針を發明す。(西曆一七三〇—一七九〇)

蕩々泪々

泪、水、涙、

泪、水、涙、

くるなり。儒教の存するところ、今なほ孔子あらざるはなく、佛寺の建つところ、到るところに釋迦あり。耶蘇は十字架にかゝりきと雖も、今なほ基督教徒の命なり。楠公の史蹟に感激するものの胸には、楠公その人の生命あり。蒸氣機關の動くところに、ワットの血液あり。電氣の線のかゝるところは、即ちフランクリンが永生の地にあらずや。まことの永生は時と共に深きを加へ、人と共に廣きを加ふ。されば一人の精神は千萬人の生命となり、河より海に、海より陸に、蕩々泪々として遂に世界を動かさずんば已まざるべし。二十世紀の文明は、かくの如き幾多永生の結果に外ならざるなり。

わが少年諸子よ。諸子は曾て死を考へしことありや。その年の弱きを以て早しとすること勿れ。死を思はずして生くるは空しく生くるなり。その死をして憾無からしめんと欲せずして、ひ

とりその生の全からんことを望むは、これ的なくして道を歩むなり。死を思ふは即ち永生を思ふなり。而して最も好くこの問題を解釋したるものは哲人傑士なり。

「櫻牛全集」

### 三 淺茅が原

六月九日の日新都の事始、八月十日の日上棟、十一月十三日遷幸と定めらる。舊き都は荒れゆけど、今の都は繁昌す。あさましかりつる夏も暮れて、秋にも既になりにけり。秋もやうく半ばになりゆけば、福原の新都にましくける人々、名所の月を見んとて、或は源氏の大將の昔の跡を忍びつゝ、須磨より明石の浦傳ひ、淡路の追門をおし渡り、繪島が磯の月を見る。或は白浦吹上和歌の浦住吉難波高砂尾上の月の曙を眺めて歸る人もあり。舊都に残る人々は、伏見廣澤の月を見る。中にも徳大寺の左大將實定卿は、舊

六月九日  
治承四年

新都

福原、攝津國

源氏の大將

源氏物語の主

人公光君

繪島が磯

淡路島の北端

吹上和歌の浦

紀伊國

白浦住吉難波

攝津國

高砂尾上

播磨國



伏見  
山城國  
廣澤  
山城國

大宮  
皇太后藤原多  
子、右大臣公  
能の女。

き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆變りはてて、稀にのこる家は、門前草深くして、庭上露茂し。蓬が杣、淺茅が原、鳥のふしどと荒れはてて、蟲の聲々うらみつゝ、黄菊、紫蘭の野邊とぞなりにける。今故郷の名残とては、近衛河原の大宮ばかりぞましゝける。大將その御所へ參り、まづ、隨身を以て、惣門を叩かせらるれば、内より女房の聲にて、誰そや。蓬生の露打ちはらふ人もなき所に、と咎むれば、これは福原より、大將殿の御のぼり候。と申す。さ侍らば、惣門は鑰のさゝれて候ふぞ。東の小門より入らせ給へ。と申しければ、大將さらばとて、東の小門よりぞ參られける。

大宮は、御つれづれに、昔をや思しめし出でさせ給ひけん。南面の御格子あけさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將つと參られたれば、暫く御琵琶をさしおかせ給ひて、夢かや現か。これへこれへ。とぞ仰せける。昔今の物語どもし給ひて後、さ夜もやうく更けゆけば、舊き都の荒れゆくを、今様にこそうたはれけれ。

舊きみやこを來て見れば、淺茅が原とぞあれにける。月のひかりはくまなくて、あき風のみぞ身にはしむ。

と押返し押返し三返謠ひすまされたりければ、大宮を初め奉りて、御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける。さる程に、夜もやうやう明けゆけば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。〔平家物語〕

#### 四 作ることと見ること 岩城準太郎

作ることと見ることは、人心の内部に存する止むに止まれぬ要求である。作るは自ら或事物を作爲することであり、見るは他人の作爲した事物を觀覽することである。これは實用的のことである、遊戯的のことであるとを問はず、あらゆる人生の事物に

岩城準太郎  
富山縣の人、  
國文學者、奈  
良女子高等師  
範學校教授。



## 表現

就いて見られる現象である。こゝには唯作ると見るといふ二つの言葉を出したけれども、それは代表的の意味に過ぎないので、作るには、制作すること、行爲すること、演奏すること、言説すること、その外すべて創造すること、表現することを包括するのであり、見るには、見物すること、聴聞すること、玩味すること、讀解すること、その外すべて受用すること、鑑賞することを包括するのである。この二つの作用は、人間の本能的に固有してゐる衷心の要求から生れるものである。

子供のすることをを見ると、何事によらず外界の事物を見たがる、聞きたがる、知りたがる、翫びたがる、味ひたがる。そして又之を摸倣したがる、言ひあらはしたがる、作りたがる、爲したがる、演じたがる。即ち子供は、自ら何事をか作爲し、表現したくてたまらないのみならず、又他の作爲し表現したことを觀覽し鑑賞したくてたま

ハモニカ  
Harmonica.

## 剽切

らないのである。この二つの要求は、本來同じ心持から出てゐるので、他人の作爲し、表現した事物を見たがる心は、即ち自己みづから表現し、作爲したがる心であり、自己が表現し、作爲する心は、即ち他の作つた事物を鑑賞し、觀覽する心である。飴屋の笛に聞きほれる心持は、自らハモニカ<sup>\*</sup>を吹く心持であり、竹きれで戦争ごっこをする心は、即ち活動寫眞の立ちまはりを喜び見る心である。二つはその現れる形を異にしてゐるけれども、畢竟同一の心持の二つの方面になるのである。大人の心理もこれに變りはない。

右は極めて一般的に言つたので、人生百般の現象に廣く當てはまる事理である。だから之を狭く藝術の上だけに適用し、更に一層狭く文學だけに適用すると、もつと具體的にもつと剽切に説述することが出来るのである。之を文學に限つて説くならば、作るは創作であり、表現であり、制作であり、見るは讀解であり、鑑賞であ



## 價値の感

り、批評である。文學の起源に關しては、學者の間に相當に議論のあることであるが、その何れに従ふに關らず、人間の欲求としてこの二つが強くはたらいてゐることは争はれない。自然の好景に接する。人事の曲折に遭ふ。之に接し、之に遭うて刺戟を受ける。自分の心に何等かの反應を起す。その反應は之を表現しないで葬り去るには忍びない價値の感を伴ふ。或は默殺し去ることの出來ない愛惜の感を伴ふ。或は無意識に表現してしまふ程、強い引力を感じず。かうしてこれを一つの創作の形にまとめ、これに一つの表現形式を與へるやうになる。同時に又他人がこのやうな創作表現を提供した場合に、これを読み味つて、心理に刺戟を受ける。反應が起る。まだ見ぬ好景に身自ら接する思をする。或は曾て知らない一場の風光を心内に創造する。又曾て見たことのある光景を再現する。人事に關するものなら、まだ經驗しない

## 反應

## 再現

## 邂逅

曲折に面とむき合つた思をする。或は又以前に經驗した事象に再び邂逅したやうに想はれる。これらの感味に引きつけられて讀まないではゐられない、好悪是非の感を起さないではゐられないこととなる。かうして創作と批評とが起り、表現と鑑賞とが成立つのである。

かう觀察して來ると、創作と批評、表現と鑑賞とは、極めて密接な關係を有つてゐる事柄であつて、創作する心なしに批評することには困難であり、鑑賞する心なしに表現することも無理である。作家と批評家とを區別して考へるのは、全く便宜上のことに過ぎないので、創作の心持を缺いてゐる人に批評の出來る筈もなく、批評の心を有たない人に創作の出來るわけもない。表現の巧拙は直接に鑑賞の力に關係し、鑑賞の當否は常に表現の腕前に關係するので、専門の鑑賞家といふものや、表現の専門家といふものは、要



するに低級な範囲にのみ有りうるものである。批評は見方によりては一種の創作であり、創作は又一種の批評であらねばならぬ。

―「表現と鑑賞」―

### 五朝 露

釋 大魯

足袋脱いで小石振ふや菫草

風下の黄檗寺や麥ほこり

夕顔や湯あみをかくす古すだれ

高井几董

鶯の隣へ逃げて初音かな

勅額の尊く霞む櫻かな

門口に風呂焚く春の泊りかな

釋 大魯  
姓は吉分、阿波國の人、俳人、蕪村門下、安永七年歿、年未詳。

高井几董  
京都の人、俳人、蕪村門下、寛政元年歿、年四十九。

黒柳召波

沖に降る小雨に入るや春の雁

寂しさは天井高し寺の蚊帳

子の顔に秋風白し天瓜粉

―「俳文俳句抄」―

黒柳召波  
京都の人、俳人、蕪村門下、明和八年歿、年未詳。

### 六 小品四篇

一 里 祭

伴 蒿 蹊

葉月長月は、田舎の神まつり多かり。今年はわきて、二百十日、二

伴 蒿 蹊  
名は資芳、近江國の人、國學者、文化三年歿、年七十四。



新搾り

しどろ

十日などに荒き風の煩ひもなく、早稲は疾く刈りはてて、中手奥手も、すぎ〜に赤らむ垂穂の心ゆくに、にぎはひまさりて、古びたる鼓張り改め、神主の烏帽子装束更に調じなど、新米のもちひ、新搾りの御酒、晶物干魚取りならべたる神供まゐり、あるは神樂の拍子のしどろなるを奏し、あるは、相撲して、どよめくもあり。又さばかりの式だになくて、たゞ里長をはじめ、老いたるも若きも、拜殿にうち集ひ、酒にゑひしれて、めづらしげなきなりはひの物語を大聲に語りあふ樂しさを、神事なりと思へるも見ゆ。こはなか〜賀茂祭のおほやけぶり、祇園會のきら〜しきよりものどやかに、家々醉人を扶け得て歸るといふなるもろこしの社日のさまさへ通ひて、神も嬉しと見そなはし給ふらんかし。

二 山

おのれまだ若かりしより、半の齡過ぐるまでも山踏みすること

おほやけぶり

家々云々

「鵜湖山下稻

粟肥、豚穿鶏

時半掩扉、桑

柘影斜秋、社

散、家々扶得

醉人、歸、三

體詩、(張演)

秋夕雲  
あめになる空  
とは見えぬ雲  
の色も秋はゆ  
ふべの袖ぬら  
しける 蕭蹊

心癖

をよみして、歩みはすくよかにもあらずながら、平なるをゆくよりも、木の根を傳ひ、巖を踏むは、はこび易く覚えしまゝに、東に遊びては、二上の筑波根を攀ぢ、うば玉の黒髪山の奥にわけ入り、木曾路を経て、姨捨にも遊びしを始め、西に吉野は春秋に三度まで登りたれば、そのついでに多武の峯、龍門などまうでぬ。まいて、まぢかき山

秋夕雲

あめにならぬ空  
とは見えぬ雲  
の色も秋はゆ  
ふべの袖ぬら  
しける 蕭蹊

蕭蹊筆蹟

城近江の名だたる山々は、いくそたびとも知らず、不二淺間は遠く見ゆるこそと覺えたれば、登らぬ憾みもなし。今老い果てては、はつかに小高き所も思ひ絶えて、かき籠れど、猶心癖に、萬の見物もこれにしくものなしと覺ゆるから、閑田廬をかまへて、背面には、比叡より稻荷の三つの峯かけて、山竝を仰ぎ、うしろには、愛宕より嵯峨



よすが

仁者の心

「仁者樂山。」  
(論語)

大江小鹽の峯つゞき、南を遙かに望みて、日月の出で入りもかくる  
る隈なきに、あしたの霞、夕の霧のたゞずまひ、この頃は時雨の雲の  
定めなきも、立ちて見、居て見、心をやるよすがとす。  
うちむかふ山邊のもみぢめづるまに遠きは雪のひ  
かり見せなん  
折節の遷り變るもあはれに、仁者の心は知らねど、樂しきは山に  
こそ。

三 漁父辭

清水濱臣

「閑田文章」

清水濱臣  
姓は藤原、江  
戸の人、國學  
者、文政七年  
歿、年四十九。  
故郷の鱸  
吳人張翰の故  
事。  
直なる針に  
太公望の故  
事。

秋吹く風に耳欬てて、故郷の鱸の鱠を思ひ出でけん人こそ、げに  
さる事とは覺ゆれ。岸の額に老の浪をたゞみて、直なる針に、王公  
の位を釣りえし翁は、うらやましくもあらずや。我はたゞ世を捨  
て舟に棹して、山陰のしづけく、水草の清からんあたりに、息の緒の  
かぎり心を遣りて、うへなき樂しみとはなしぬべきぞかし。

四 擣衣を聞く

しきる  
近しと聞けば遠く、遠しと聞けば近し。しきるもたゆみ、たゆむ  
も又しきる。雁がねの聲の擣衣をさそふにやあらん。擣衣の音  
の雁がねをさそふにやあらん。あなあやし、あなあやし。そもこ  
の音の悲しきか、住む里のさびしきか。擣つ折のうきがゆゑか。  
皆あらず。聞く人の心のわびしきなり。  
「泊滔文藻」

七 洛北大原村

佐佐木信綱

佐佐木信綱  
三重縣の人、  
國文學者、歌  
人、文學博士、  
明治五年生。

忘れがたきは大原の里なり。高野川にそひ、比叡の山にむかひ  
てゆく。道は山すそをめぐりて、谷あひ山かげには、野菊さき、薄な  
びけり。八瀬の里をすぐれば、山路いよ／＼深く、二里あまりにし  
て大原とぞいふなる。  
西と東とには山竝連りたれど、中はうちひらけて、家あり、田畑あ



まだし

西行

俗名佐藤義清、鳥羽上皇に仕へ、後出家して西行と云ひ、圓位と號す、歌僧、建久元年歿、年七十三。

寂然

俗名藤原賴業、歌人、歿年未詳。

惟喬親王

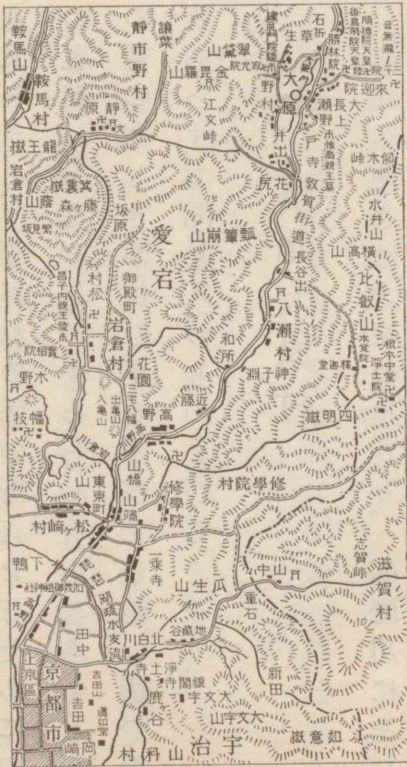
文徳天皇の皇子、和歌をよくせらる、寛平九年薨、御年五十四。

歌人

在原業平、阿保親王の第五子、歌人、元慶四年歿、年五十六。まさやか

り。梢の紅葉はまだしけれども、田の面は稻重く實りて、秋ふかし。高野なる西行が寄せたる歌に答へて、寂然がよめる、

何となく露ぞこぼる、秋の田の引板ひきならず大原のさと



のべば、藤波の盛りあやなる王朝史の序幕の、このかすけき山里にて、静けくもはたあはれにも開かれしそのかみぞ、まさやかなる。

のさびしき味ひ、心にしみわたりておぼゆ。

まづ惟喬親王の陵に詣づ。雪わけておとなひまらせし歌人の上をし

頼阿

俗名二階堂貞宗、歌人、元中元年歿、年八十四。

恵心僧都

法諱は源信、俗姓は下部、比叡山恵心院に住せしにより、かく稱す、天台宗の高僧、寛仁元年歿、年七十六。

雛僧

聲明

三千院は、杉苔庭に生ひて、鶴鴿池の岩間を飛びかへり。頼阿が歌によめりし涙の櫻は跡たえたれども、ものふりたるところのさまに心もすみつ。往生極樂院には、恵心僧都が母のために造りてふ佛像あり。船形の天井なる畫の箔落ちて、筆のあとおぼつかなく残り。夜に入れば鹿のなく聲もきこゆ。一夜宿り給へとの、前の天台座主なる梅谷大僧正があつき志にもそむき、急ぐ旅路のそこ、と見めぐる。名をとへば、何々坊何々と答ふる雛僧に案内せられて、呂律の川の源を音無の瀧にたづね、請ひてその雛僧が聲明をうたふを聞きつ。ま



院 千 三



良暹法師

白河・堀河兩朝時代頃の歌人、叡山祇園の別當、歿年未詳。

素意法師

俗名藤原重經、和歌をよくくす、嘉保元年歿、年未詳。

建禮門院

平徳子、高倉天皇の中宮、安德帝の御生母、建保元年歿、御年五十七。

た法華堂をたづね、隱岐遠流の御身ながらに、遠くこの山里を忘れかねさせられ、遺言して御髪をこゝに納めさせられし詩人の上皇、後鳥羽院の御上に涙をそゞぐ。朧の清水は民家のかたへにあり、その昔こゝに良暹法師のすめりし時、素意法師のよみておくれる、



建禮門院木像

門院が御像をみる。一代の國母と仰がれ給ひし花の御生涯の名残を、この山かげの墨染の袖とかへし給ひし御上は申すまでもなく、殊に忍ばるゝは、女院こゝに住み給ひて後、院を慕ひておとなひ

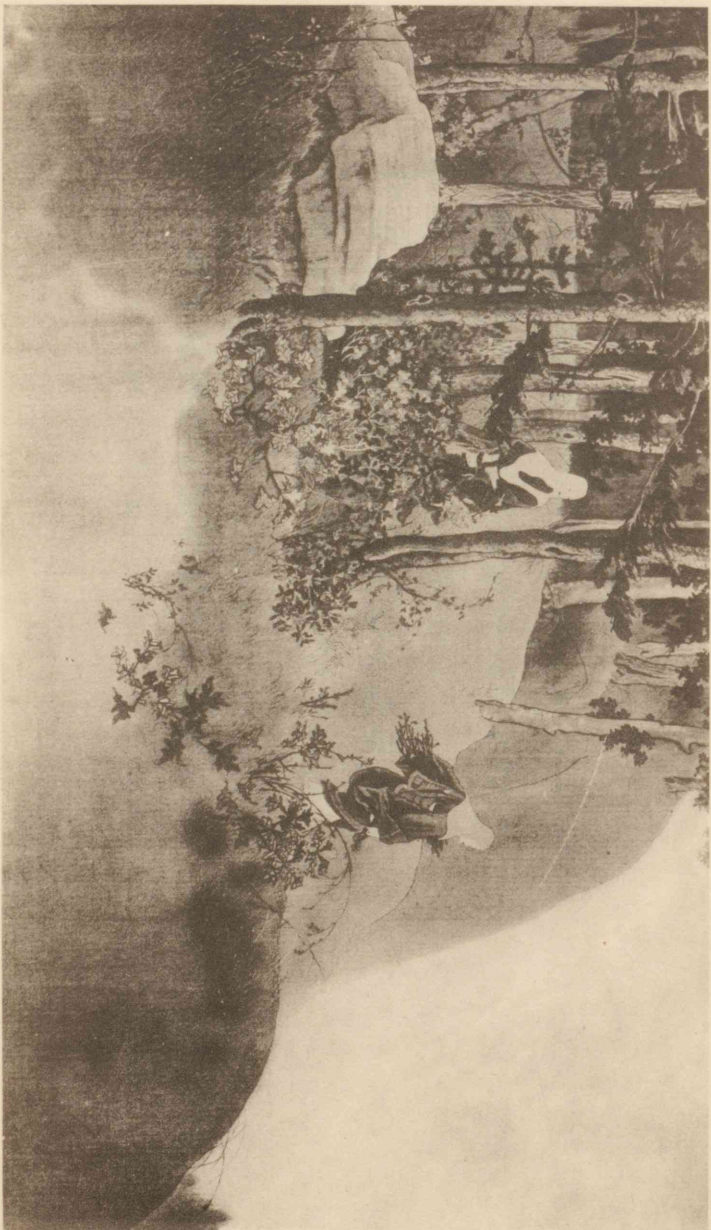
水草ゐしおぼろの清水そこすみ  
てこゝろに月のかげはうかぶや

の歌のあはれは、今も昔ながらなり。

寂光院は、こだかき岡の上にある。か

けひの水ほととぎす音して、折から夕暮

のうすれし日かげさびし。燈して、建禮



(叡山觀村下)

卷繪幸御原大



右京大夫  
藤原伊行の  
女、建禮門院  
の侍女。

柳原安子  
京都の人、桂  
園門女流歌人  
の白眉と稱せ  
らる、慶應二  
年歿、年八十  
二。  
かへさ

まゐらせし女歌人右京大夫のことどもなり。前庭の鐘樓のもと  
には、幕末の女歌人柳原安子の歌碑あり。

かへさの道は全く暮れぬ。田も、畑も、森も、山も、夕霧の中にうも  
れて、空にはかすかなる月影の、道の邊の蟲にこたふるが如きもあ  
はれなり。源氏物語なる夕霧大將の、落葉宮をとひ給ひしあはれ  
など、心にうかびつ。

八瀬大橋のわたりにては葬儀のかへさとて、白き衣きて燈火も  
たる大原女の群にあひつ。さながらに夢の國の人とこそおぼえ  
しか。

京都に遊びし折、市田氏に案内せられて音づれし大原の秋のあ  
はれも、今は五年前の語りぐさとなりつ。秋ふかき武藏野の昔を、  
東京郊外の稻田にしのおこの頃、わが心はそゞろ大原の山里にむ  
かふ。

「竹柏集」



### 八扇の的

さる程に阿波讃岐に平家を背いて、源氏を待ちけるつはものども、あそこの峰、この洞より、十四五騎、二十騎、打連れ、打連れ馳せくるほどに、判官ほどなく、三百餘騎になり給ひぬ。今日は日暮れぬ。勝負を決すべからず。とて、源平互に引退くところに、沖より尋常に飾つたる小船一艘、汀へ向けて漕ぎよせ、渚より七八段ばかりにもなりしかば、船を横ざまになす。あれはいかにと見るところに、船の中より年の齡十八九ばかりなる女房の、柳の五衣いづまぎに紅の袴着たるが、皆紅の扇の日出したるを、船のせがいに挟み立て、陸に向ひてぞ招きける。

判官、後藤兵衛實基を召して、あれはいかに。と宣へば、射よとこそ候ふらめ。但し、大將軍の矢面に進んで、傾城を御覽ぜられん處を、

判官

源義經。

今日

元暦二年二月十八日。

女房

建禮門院の雜司玉蟲の前。

手だれ

手だれにねらうて射落せとの謀とこそ存じ候へ。さりながら、扇をば射させらるべうもや候ふらん。と申しければ、判官、身方に射つべき仁は誰かある。と問ひたまへば、手だれども多う候中に、下野國の住人那須太郎資高が子に與一宗高こそ、小兵には候へども、手はきいて候。と申す。判官、證據があるか。さん候。かけ鳥などを争うて、三つに二つは必ず射落し候。と申しければ、判官、さらば與一呼べ。とて召されけり。

與一、その頃は未だ二十ばかりの男なり。褐に、赤地の錦を以て、衽おそひ端袖いろへたる直垂に、萌黄緘の鎧着て、足白の太刀をはき、二十四さいたる截生の矢負ひ、薄截生に、鷹の羽わり合せてはいだりけるぬための鎧をぞ差添へたる。滋籐の弓脇に挟み、冑をば脱いで高紐に懸け、判官の御前に畏まる。判官、いかに與一。あの扇の眞中射て、敵に見物せさせよかし。と宣へば、與一、仕つとも存じ候はず。



これを射損ずるものならば、ながき身方の御弓矢の瑕にて候ふべし。一定仕らうざる仁に仰せ附けらるべうもや候ふらん。」と申しければ、判官大に怒つて、今度鎌倉を立つて西國へ向はんずる者どもは、皆義經が下知を背くべからず。それに、少しも仔細を存ぜん人々は、これよりとう／＼鎌倉へ歸らるべし。」とぞ宣ひける。與一、重ねて辭せば悪しかりなんとや思ひけん。「さ候はば、外れんをば存じ候はず。御諛で候へば、仕つてこそ見候はめ。」とて、御前を罷り立ち、黒き馬の太う逞しきに、まろほや摺つたる金覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、弓取りなほし手綱かいくつて、汀へ向いてぞ歩ませける。身方のつはものども、與一の後を遙かに見送つて、この若者一定仕らうずると覺え候。」と申しければ、判官も頼もしげにぞ見給ひける。

矢比少し遠かりければ、海の中一段ばかり打入つたりけれども、

我が國  
與一の生國下  
野國を指す。  
日光權現  
栃木縣日光山  
なる二荒山神  
社、事代主命  
を祀る。  
宇都宮  
宇都宮市、二  
荒山神社。  
湯泉大明神  
同國那須郡那  
須山にあり。

なほ扇のあはひは七段ばかりもあらんとこそ見えたりけれ。頃は二月十八日酉の刻ばかりのことなるに、折ふし北風烈しう吹きければ、磯打つ波も高かりけり。船はゆり上げゆりすゑ漂へば、扇も申に定まらずひらめいたり。沖には平家船を一面に並べて見物す。陸には、源氏轡を並べてこれを見る。いづれもいづれも、晴ならずといふことなし。與一目を塞いで、南無八幡大菩薩、別しては、我が國の神明、日光權現、宇都宮那須の湯泉大明神、願はくばあの扇の真中射させてたばせ給へ。これを射損ずるものならば、弓きり折り自害して、人に二たび面を向くべからず。今一度本國へ歸さんと思しめさば、この矢はづさせ給ふな。」と、心の中に祈念して目を見開いたれば、風も少し吹きよわつて、扇も射よげにこそなつたりけれ。與一、鏑を取つて番ひよつびいてひやうと放つ。小兵といふ條、十二束三伏、弓は強し、鏑は浦響く程に長鳴りして、あやまた



ず扇の要際一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。鏑は海へ入りければ、扇は空へぞ揚りける。春風に一揉二揉もまれて、海へさつとぞ散つたりける。皆紅の扇の、夕日のかゝやくに、白波の上に漂ひ、浮きぬ沈みぬながれけるを、沖には平家、舷をたゝいて感じたり。陸には源氏、箆をたゝいてどよめきけり。〔平家物語〕

九塔影

河井醉茗

墨繩たゞすこだくみが、たなぞこの上につくられて、朝、狭霧の晴れゆけば、寶珠を天に捧げ持ち、岸に聳ゆる五層塔。

河井醉茗  
名は又平、大阪府の人、詩人、明治七年生。

金輪際

藏めし經も蠹みて、  
供養忘れし末の世の  
雲をさへぎる勾欄に  
清き匏の痕見れば、  
塵に氣韻も残るかな。  
秋は露盤に露うけて、  
扉は神祕に閉されぬ、  
四天の神に守られて、  
金輪際に根を埋め、  
夜は北斗をうかゞへり。



浮圖

家に住まざる山鳩の  
 巢くふに處得たればか、  
 虚空はるかにかけれども、  
 晝棟の朱の古びたる  
 浮圖を慕うて歸るらん。  
 入日は西に傾きて、  
 五重の屋根のあざやかに  
 重りうつる草の上、  
 月は廂にうかび出て、  
 九輪の影は水に在り。  
 雲の崖より吹きおちて、

風湖を拭ひ去る、  
 波の面に刻まれし  
 藝術の花に咲きちらふ  
 時の力の遠きかな。

その世に媚びし歌反故は  
 曆の嵐に破れたり、  
 生命の岸を下に見て  
 天に呼吸する塔の  
 高き姿を水に見よ。

「塔影」



一〇 芭蕉の臨終

沼波瓊音

沼波瓊音

名は武夫、名古屋市の人、文學者、俳人、第一高等學校教授、東京帝國大學講師、昭和二年歿、年五十一。

九日

元祿七年十月九日。

花屋の主人

大阪、御堂前東へ入る、南久太郎町の花屋仁左衛門。



松尾芭蕉

九日の日は晴れて明けた。皆が介抱して、芭蕉の夜具も寢衣もさつぱりと新しいのに取換へさせた。その新しい夜具と寢衣は、花屋の主人の厚意で整へて呉れたものであつた。仁左衛門といふ人は、毎日裏座敷へ來るといふやうなことはしないで、母屋に居て、何かと芭蕉及び連衆の便宜を陰になつて黙つてして居るといふ人であつた。貸主が見舞に來るといふ事が、一同の氣兼ねになることをよく心得て居る苦勞人であつた。鼠色の丸頭巾、白いさわくとした絹の寢衣着て、けばくしか

空炷

らぬ唐草模様の、ふつくらと綿の多い絹夜具に寢た芭蕉の姿は神しく見えた。不淨の病とはいへ、病人のたしなみのよいのと、世話の行届くのとて、些の悪臭も無く、たゞ空炷の香が、炷かぬ折も室に漂つて居るのみであつた。

着換は面倒であつたが、清爽の心持を芭蕉は嬉しく思つた。

「何處かで行倒れになる筈のわしが、こんな美しい褥の上で、しかも皆の親切な介抱を受けて死ぬとは、わしは思ひの外仕合者ぢやつた。……吞舟や、昨夜の匂を皆に見て貰はうか。」

まだ掃除やら何やらで、丁度皆が病室から次の間へかけて居たところであつた。昨夜御句が出来たと聞いて、皆そこに坐つた。ただ丈草と去來が勝手の方へ行つたので、これも呼んで來た。

吞舟が書いたのを、去來に渡した。去來は一禮して、心で一度讀んでみて、さて高聲に、

吞舟

近江國大津の人、歿年未詳。

丈草

姓は内藤、尾張犬山藩士、寶永元年歿、年四十五。

去來

姓は向井、肥前國の人、寶永元年歿、年五十四。



惟然  
姓は廣瀬、美濃國の人、正徳五年歿。

支考  
姓は各務、美濃國の人、享保十六年歿、年六十七。

旅に病んで夢は枯野を駆けめぐると讀んだ。一同は各自に心で再誦してみた。企てては成るべからざる作と、誰も誰も感じた。そこには物狂ほしさ妻さが溢れて居るが、そして底に寂靜なる深い悲哀が流れて居る。一同は三度四度心で誦し反した。惟然<sup>\*</sup>は口に出して小聲で幾度も幾度も誦し反した。

「なほ駆けめぐる夢心とも、枯野をめぐる夢心ともして見たが、やはり夢は枯野をがよいやうに思ふが。」

「夢は枯野を駆けめぐる、これで御座ります。これで御座ります。まことに拜誦致せば、誰も毛髮爲に動くの名章と存じまする。」と、支考<sup>\*</sup>が感涙をうかべつゝいつた。

「さうかな。これは辭世では無い。辭世で無いことも無い。ただ病中の心を寫したまでぢや。……思へば生死の一大事を前に

妄執

置きながら、如何に生涯好んだ風流とはいへ、是も妄執ぢや、妄執ぢや。……わしの妄執も、もはやこれ限りぢや。……」

風神

「妄執では決して御座りません。」と去來がいつた。「朝雲暮雨、山水野鳥、日々の見るもの、聞くもの、すべて御捨てなさらぬ。老師の心身はたゞこれ一切風雅で御座ります。かやうな重病の床に、なほ且かゝる風神の名章をお唱へ遊ばす。まことに門葉の喜びで御座ります。他門の聞えて御座ります。末代の龜鑑で御座ります。」と且泣き且いつた。

門葉の喜びの爲や、他門の聞えの爲の御作ぢや無いわと、惟然はむらゝとなつたが、黙つて自ら感ずる所を深く感じて居た。芭蕉はもう、うとゝとして居た。時々はつと目を見開くので、次郎兵衛が用を聞かうとすると、又うとゝと眠つた。芭蕉の目

次郎兵衛  
芭蕉の下僕。



のまはりには、何となう黝い色が浮いた。もう痢數は數へ切れなかつた。成るべく多人數病床に侍することにした。この日はよく昏睡した。人々は高い聲を出すのを憚つた。さうして森として暮れて行つた。

忽ち芭蕉は瘦せ細つた手を二三度振つた。

「飛ぶ飛ぶ。秣が飛んでしまふわ。」

といつた。

驚いて皆芭蕉を見詰めると、目が覺めたのでも無く、くたりと振つた手を蒲團の上に落して眠つて居た。次郎兵衛はそうつとその手を蒲團の下へ藏めてやつた。

ふと芭蕉は目を大きく開いた。

「誰ぢや、一節切吹くのは。」

皆思はず耳を欬てた。何も物音は無かつた。

「誰も吹いては居りません。」と去來が徐ろに答へた。

芭蕉はさうかともいはず、まじくと灯を見詰めて居た。「あー」と長くいつて、又眠に落ちた。

―「芭蕉の臨終」―

一一 梅津文鱗へ

寶井其角

歳尾之爲御壽、如例年遠路之處、酒料一封、落鹽漬一桶、被贈下、御

厚志之程、幾久しく受納致し候。御序に

御家内はじめ御社中へもよろしく御傳

へ下さるべく候。しかれば、去る十四日

本所於都文公、年忘れの一興御催し有之、

嵐雪杉風、我等も一席にて、折から雪おも

しろく降りいだし、風情手にとるが如く、庭中の松は雪をいた

だき、雪間の月は暗を照し、風興今は捨てがたくして、夜たゞ更



寶井其角

寶井其角 近江國の人、俳人、蕉門十哲の一人、寶永四年歿、年四十七。  
都文公 土屋主税、本所松坂町なる吉良氏の隣家に住みし人。  
嵐雪 姓は服部、淡路島の人、蕉門十哲の一人、寶永四年歿、年五十四。



杉風  
姓は杉山、芭蕉の門人、享保十七年歿、年八十六。  
風興

けゆくまゝには、はや丑みつ頃になりゆき、犬さへ吼えず、うちしづまり、文臺料紙も押しかけた寄せ、四五人集りて、蒲團をかづき、夢のうき世といふ間もあらせず、はげしく門をたゞくもの兩人、玄關に案内し、我等は浅野家の浪人、堀部彌兵衛、大高源吾にて、今夕隣家吉良上野之介やしきに押しよせ、亡君年來の遺恨を果さんとて、大石内藏之助始め、都合四十七人門前にたゞずみ、唯今吉良氏を討ちほろぼし候處、近隣之御よしみ、武士の情、萬一御加勢も候はば、末代之御不覺と存じ候。願はくは、門戸を厳しく御防ぎ、火之元御用心下され候はば、忝く存じ候とて、いひも果さず、たちいづる。その勢の神妙たることいふべくもあらず。今は俳友も、これまでなりとて、其角幸こゝにあり、生涯の名残をみんとて、門前にはしり出づれば、おのゝ吉良家にしのびいり候ほどに、

我が雪とおもへば、かろし笠の上

と高々に一聲呼ばはり、門戸を閉して内を守り、堀越しに提燈とぼし、始終を窺ふに、そのあはれさ骨身にしみ入り、女人の叫び、童子の泣き聲、風飄々と吹き、そうて、曉天に至りては、本懐已に達したりとて、大石主税、大高源吾、物穩便に謝儀を述べたる事、武士の譽といふべきなり。

日の恩やたちまち碎く厚氷

と申し捨てたる源吾が精神、いまだ眼前に忘れがたし。貴公年來之入魂故、具に認め進じ申し候。早春まで彼是御さしくり、御出府候はば、彼の落着承り届け、無餘儀伏劍に及び申し候はば、竊かに追善も相營み可申候。先は餘日も無之、書餘期貴面之時候。恐々謹言。

十二月廿日

其角 花押

入魂  
伏劍



文鱗  
佐竹藩士、梅津半左衛門。

文\* 鱗 様

月雪の中や命の捨てどころ

「古今名家尺牘文」

一二 元祿時代の文學

藤岡作太郎

泰平年久しく、貴賤ともに慘澹たりし父祖の世を忘れて、食に飽き、衣は暖かに、安樂なる生活を送れば、さらに新なる文藝の行はれんことを望むや切なり。この需要に應じて、種々の文學大いに興り、こゝに元祿時代の盛運は來たれり。蓋し中古以來の文學は、その思想、用語共に舊習に縛せられて、狭小なる局面に逡巡するのみなりしに、始めて先例の桎梏を脱し、廣く森羅萬象に應接して、自在に事物を研究し、感想を述ぶるに至れること、これこの盛時の賜なりき。

將軍綱吉漢學を好み、しばしば儒者を集めて、經義を討論せしめ、

藤岡作太郎  
金澤市の人、  
文學博士、國文學者、東京帝國大學助教、明治四十三年歿、年四十一。

桎梏

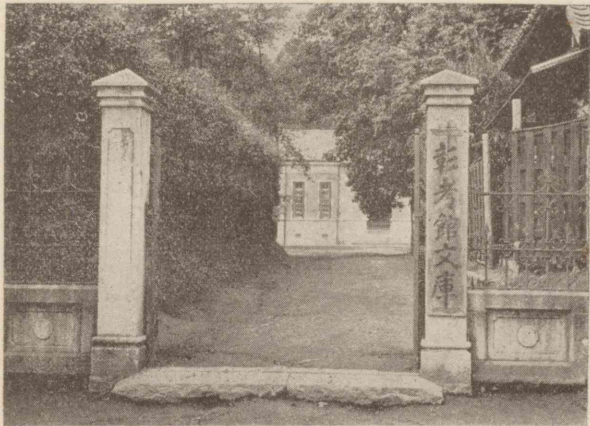
またみづから經書を講じ、諸侯も競うて儒者を聘す。かくて漢學頗る熾に、學者一時に輩出す。林家には、羅山の孫鳳岡、幕府に信任せらる。木下順庵は京の人、のち江戸に出づ。その學博通不偏を旨とし、門下に雨森芳洲、新井白石、室鳩巢、祇園南海等著名の士多し。伊藤仁齋京に起り、朱學は孔孟の古意にあらずとして、別に古學を立て、その子東涯博覽にして、よく父の學を祖述す。荻生徂徠江戸にあり、また朱學を駁し、六經を重んじて、古文辭學を立て、仁齋父子と東西に對峙す。その門人のうち、太宰春臺は經義に通じ、服部南郭は詩文をよくせり。

筑前の士貝原益軒も當時の碩學なり。性謙讓にして、博識を尙はず、書を著すや、概ね平易にして、實益あらんことを期し、普通文に記して、丁寧懇切なり。江戸の新井白石は、將軍家宣及び家繼に仕へて、政務に參與す。學博く、識高く、わが國の歴史、制度、語學等に關



犀利

して有益の著多く、行文犀利にして、透徹せざるところなし。眞に古今を通じて稀なる文豪なり。



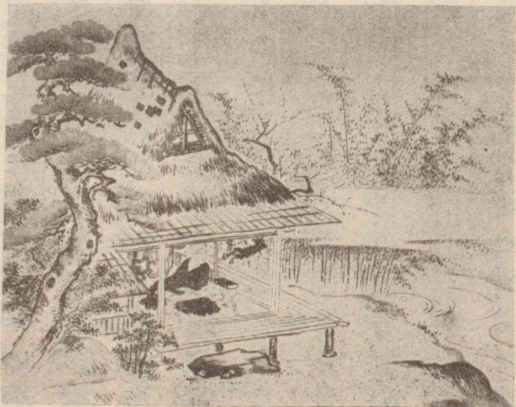
彰考館

この時代に於て、和漢の文學に大功ありしを水戸侯徳川光圀とす。光圀は家康の孫なり、明の遺臣朱舜水を聘して、學を講ぜしめ、また修史の念篤く、彰考館を開き、儒臣をこゝに集めて大日本史を撰せしむ。扶桑拾葉集禮儀類典等も、光圀が臣下を督して編せしめたるものなり。その學を重んずるところ、大義名分を正すにありき。

國文學の面目を一新せしことは漢學にも超えたり。北村季吟京に出でて、松永貞徳に學び、のち幕府

模糊

に聘せられて、江戸に下り、これより代々歌學所を掌る。季吟の著すところ源氏物語湖月抄枕草紙春曙抄等甚だ多く、いづれも懇ろに古文を註釋して、初學に便を與へたりといへども、從來の學を保守して、その外に出でず。その守舊なるに對して、革新の旗を翻ししもの、江戸に戸田茂睡あり。梨本集を著して、歌道の積弊を論じたるが、いまだ大なる影響を見ず。國文學開拓の主功は、實に釋契沖にあり。



契沖の庵室

光圀古典の研究に志あり、殊に古來萬葉集が模糊の間にあるを遺憾として、その註釋を計る。時に大阪に下河邊長流あり。古文に通じ、中古以來の僻説を捨てて、先人



闡明



荷田春滿

未發の見を立つ。光圀の依託を受けて、かの註釋に従事せしが、終らずして歿し、釋契沖その業を繼ぐ。契沖は眞言宗の僧にして、教學の傍ら國文學を好み、造詣至つて深く、識見世に絶す。その著述少からざるが中に、學界に大影響を與へしは、萬葉代匠記と和字正濫抄となり。代匠記は即ち光圀の囑に應ぜしものにして、偉大なる奈良文學はこゝにはじめて闡明せられたり。正濫抄は、中古以來假名遣の誤れるを、正せる書なり。

やゝ下りて享保の頃、京に荷田春滿あり。深く國史律令に通じ、從來、國書を解し、神道を説くものの、佛教かさなくば儒教の意を迎合せるを非とし、その本來の古意を明らむるを以て己が任とす。

芭蕉  
松尾桃青

吟腸

造化の祕

翕然

いはゆる國學とて、古典を究めて、國體のあるところを學ぶは、この人に起れるなり。幕末の際、勤王攘夷の説の沸騰せるは、水戸の學と國學との感化與りて力ありき。學問の方面における文學の發達は、凡そかくの如くなるが、純文學の進歩は更に著し。俳諧には、伊賀の人松尾桃青、京に出て北村季吟に學び、のち江戸に來りて、正風を起し、また東西に周遊して吟腸を養ひ、その風を擴む。蓋し舊來の俳諧は、宗因に至りて、頗る自在なる域に進めりといへども、内容はなほ陳套にして、多くは措辭の上に幼稚なる滑稽を弄するに過ぎざりき。桃青起るに及びて、その地位を高くし、造化の祕を發くを以て歸趣とす。詠ずるところ人事よりも自然に多く、幽玄清淡にして、廣く雅俗にわたる。四方翕然として靡き、俳諧これより遍く都鄙に行はる。門人に俊秀の士多く、江戸には榎本其角の豪放なる、服部嵐雪の溫雅なるあ



り。他の地方には向井去來、森川許六、東花坊支考等、いづれも一方の重鎮たりしが、師歿して後は、各その好むところによりて説を立て、彼此對立して統一を失ふに至れり。

戯曲小説はなほさらに急速なる進歩をなしたるが、その作多く

は大阪に出づ。この地は商賈の占むると

井ころにして、儒教及び武士道の制裁も薄け

原れば、その文學もおのづから趣味低くして、

西輕佻浮華の風を帯びたり。小説は井原西

鶴出で、假名草紙の幼稚なりしを轉じて、巧

に世間の風俗を寫す、これを浮世草紙と稱

す。西鶴は大阪の人、西山宗因に學んで、俳諧に長ぜしが、才の向ふ

ところ、移りて筆を小説に染む。文章輕妙奇抜にして、法格に拘ら

ず、社會の裏面を描き出して、細微を極む。その作多くは短篇を集



めたるものなり。ついで享保の頃、京の書賈八文字屋自笑あり。

江島其碩と力を合せ、西鶴に倣ひて小説を作る。之を八文字屋本

と稱して、一時また世に行はれたり。

戯曲は謠曲等より出で、江戸幕府創立以前より既に行はれしか

ど、なほ拙劣なるものなりしが、この時代に至りて隆盛を極む。元

祿の頃、近松門左衛門あり。京に住み、のち大阪に移り、盛に戯曲を

作る。寫すところ人情の祕奥を穿ちて、才藻湧くが如く、行筆の自

在なること、行雲流水に似たり。その作百種の外に出で、時代物の

數遙かに世話物より多けれども、識者の稱美するは寧ろ後者にあ

り。ついで竹田出雲あり、文才は門左衛門に及ばずといへども、趣

向の變化に富めることは却つて勝り、今日もなほ行はるゝは、その

作に多し。次期に至りて戯曲は衰へ、近松半二などその振興に力

めしかども、大勢を挽回すること能はざりき。

「日本文學史教科書」



一三 千里が竹

近松門左衛門

近松門左衛門  
 本名は杉森信盛、長門國の人、戲曲作家、享保九年歿、年七十二。  
 親子  
 明末の人、鄭芝龍とその子鄭成功を指す。  
 李踏天  
 明の將軍、鞆烈に内應して明帝を弑す。  
 吳三桂  
 明の忠臣、司馬大將軍。  
 天啓  
 明の熹宗の年號。  
 娘の子  
 錦祥女を指す。

別れ行く舟路のすゑも、知らぬひの、筑紫は雲に埋めども、あとに擁護の神風や、千波萬波を押しきつて、時も違へず親子の舟、唐土の地にもつきにけり。鄭芝龍一官は、古郷に歸る唐錦、裝束ひきかへ、妻子に向ひ、我が本國といひながら、時遷り代かはり、天下悉く李踏天が引きいれにて、鞆靱夷の奴と成り、昔の朋友一族とて、誰を尋ねんやうもなく、司馬將軍吳三桂が生死の様子も知れざれば、何を以て義兵の旗を上げ、何所を一城にたて籠るべき所もなし。然るに、某去る天啓五年、此の國を立ちのき、日本へ渡る時、二歳に成りし娘の子を、乳母の袖に捨ておきしが、其の子が母は産み落して當座に死す。かくいふ父は八重の汐路の中たえて、いつ父母も知らぬ身が、育てば育つ草木の、雨露の恵に長ずる如く、天地の父母の助にや、

和藤内  
 鄭成功、一に國姓爺といふ。

潯陽  
 江西省九江府。  
 赤壁  
 湖北省。  
 東坡  
 姓は蘇、宋の詩人。(西曆二〇一—二一〇)



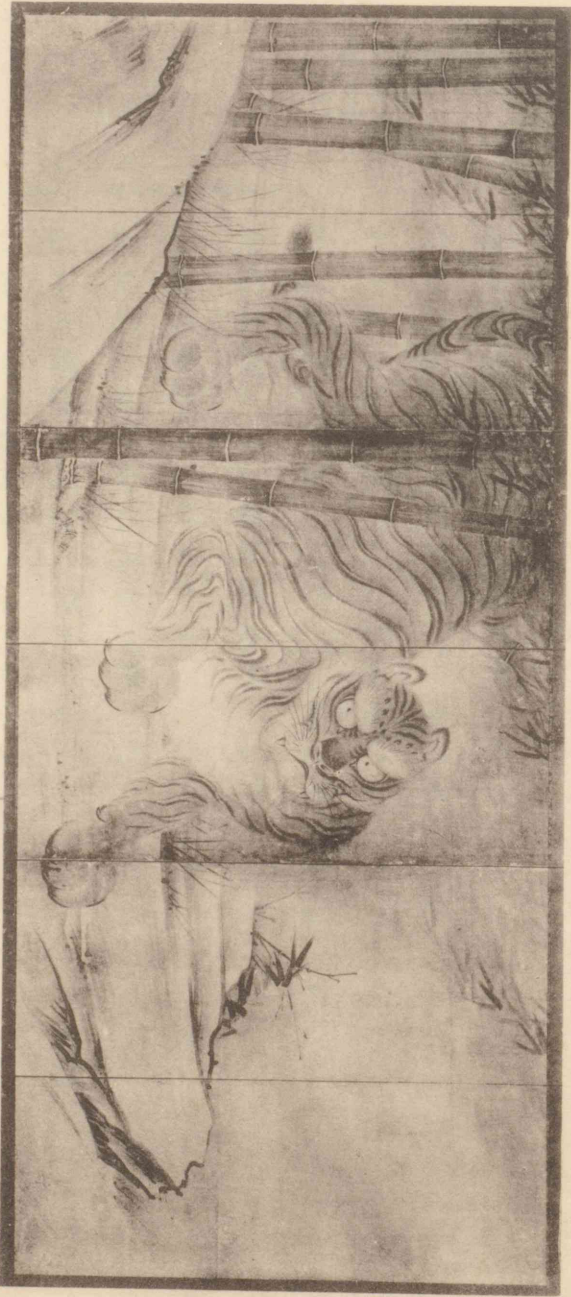
近松門左衛門

成人して今五常軍甘輝といふ大名、一城の主の妻となる由、商人のたよりに聞及ぶ。頼む方はこればかり、親を慕ふ心有つて、娘さへ承引せば、婿の甘輝もやすくと頼まるべし。是より道の程百八十里、うちつれては人も怪しまん。我一人道をかへ、和藤内は母を具し、日本の漁船の、吹流されしと頓智を以て、人家に憩ひ追ひつくべし。是より先は、音に聞ゆる千里が竹とて、虎のすむ大藪あり。それを過ぐれば潯陽の江、これ猩々の住む所。風景そびえし高山は赤壁とて、昔東坡が配所ぞや。それよりは甘輝が在城、獅子が城へは程もなし。其の赤壁にて待揃へ、萬事を示し合すべし。と、方角とてもしら雲の、日影を心覺えにて、東西へこそ別れけれ。教に任せ和藤内、人家を



我を抜かす

求め忍ばんと、かひなくしく母をおひたづきも知らぬ岩がんせき、古木の根ざし瀧津波、飛びこえはねこえ、飛鳥の如く急げども、末はてしなき大明國、人里たえて廣々たる、千里が竹に迷ひ入る。和藤内ほうと我を抜かし、なう母者人。此の脛骨に覺え有り。もう四五十里も來ませうが、人にも猿にもあふ事か。行けば行く程藪の中。むう合點したり、方角知らぬ日本人、唐の狐がなぶるよな。魅さば魅せ、宿なし旅の行きつき次第、小豆の飯の相伴」と、根笹大竹押しわけ、踏みわけ、尙奥深く行く先に、怪しや數萬の人聲、せめ鼓せめ太鼓、喇叭ちやるめら高音をそらし、ひやうひやうとこそ聞えけれ。すは我々を見咎めて、敵の取りまく攻め太鼓か。又は狐のなすわざか」と、茫然たる其の折ふし、空凄まじく風おこり、砂を穿ちどうどうどう、竹葉さつと巻きたて、吹折る竹は劍の如く、凄じなんどもおろかなり。和藤内ちつとも臆せず、よめたりよめたり。



(兼 虎 直 我 會)

虎

虎



虎嘯けば……

「虎嘯而谷風至、龍舉而景雲屬。」(淮南子)

楊香

晉の人、十四歳の時、徒手にて父を虎の難より救へりといふ。

大わらは

扱は異國の虎狩な。あの鉦太鼓は列卒の者。こゝはきこゆる千里がはら、虎嘯けば風起る、猛獸の所爲と覺えたり。廿四孝の楊香は孝行の徳によつて、自然と脱れし惡虎の難。其の孝行には劣るとも、忠義に勇む我が勇力、唐へ渡つて力始め、神力ますく日本力、刀でむかふは大人げなし。虎はおろか象でも鬼でも一挫ぎと、尻ひつからげ身づくろひ、母をかこうて立つたるは、西天の獅子王も、恐れつべうぞ見えてける。案に違はず吹く風と、共に暴れたる猛虎のかたち、ふし根に頬をすり付けすり付け、岩角に爪とぎたて、二人を目がけ、いがみかゝるを事ともせず、弓手に擲り馬手に受け、振つてかゝれば身をかはし、撓めばひらりと乗りうつり、上になり下になり、命競べ根競べ、聲を力にえいゝゝ、虎の怒り毛怒り聲、山も崩るゝ如くなり。和藤内も大童、虎も半分毛をむしられ、兩方共に息疲れ、石上につつ立てば、虎も岩間に小首をなげ、大息ついたる

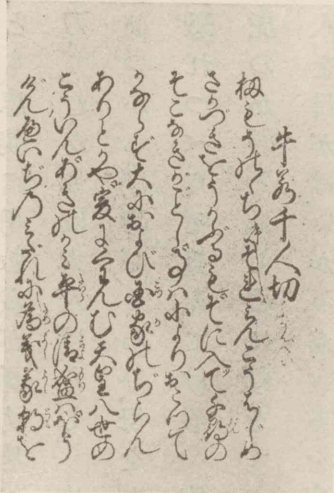


輔

牛若千人切

序そのみんこ  
うはれめさか  
づきをうかぶ  
るも、そに入  
て千尋のそ  
なきがごと  
し、事は小  
なりおつてか  
よらび、家  
のんむ、愛  
のこう、天  
あきの、か  
うの、清  
のみ、げ  
の、み  
義朝を  
天の斑駒  
素盞鳴尊、強  
暴にして、天  
斑駒を生きた  
が、神の皮割  
に、大の齋服  
こと、日本紀  
見ゆ

其の響、輔を吹くが如くなり。母藪かげより走り出て、やあ、和藤内、神國に生れて、神より受けし身體、髮膚、畜類に出合ひ、力だてして、けがするな。日本の地は離るゝとも、神は我が身に五十鈴川、大神宮の御被、納受などかなからんや。」と、肌の護符を渡さるれば、實に



尤。」と押しいたゞき、虎にさしむけ、淨さしあぐれば、神國神祕の其の不瑠思議、猛りに猛る勢も、忽ち尾をふせ、耳をたれ、じりゝじりゝと四足を縮め、恐れわなゝき岩洞に隠れ入る、尾づつを掴んで跳返し、打伏

せ、打伏せひるむ所を乗りかゝり、足下にしつかと踏まへしは天の斑駒、素盞鳴尊の神力、天照らす神の威徳ぞ有難き。かゝる所に列卒の者、群り來たる其の中に、大將と思しき者、大音

笑壺に入る

あげ、やあ、うぬは何國の風來人、我が高名を妨ぐる、其の虎は忝くも、主君右將軍李踏天より、韃靼王へ献上の爲、狩りいだしたる虎なるぞ、早々渡せ。異議に及ばばうち殺さん。しやぐわんしやぐわん。」と喚きけり。李踏天と聞くよりも、願ふ所と笑壺に入り、やあ、餓鬼も人數、しをらしい事ほざいたり。身が生國は大日本、風來とは舌長し。さほど欲しがる虎ならば、主君と頼む李踏天とやら、石花菜とやら、こゝへつき出し、誑言させい。ぢきにあうて用もある。さもない内はいかなこと、ならぬならぬ。」とねめつくる。やあ、物ないはせそ。討ちとれ。」と一度に劍をはらりと抜く。「心得たり。」と、護符を虎の首にかけ、母の側に引据うれば、繋ぎし如くに働かず。「お、お心安し。」と太刀さしかざし、群る中へ割つて入り、八方むじんにわりたてわりたて撫でまくる。列卒の大將安大人、官人ひき具し立歸り、「おのれ老ぼれ餘さじ。」と、一文字に切りかゝる。猶も神明擁護



打物

平戸  
長崎縣北松浦  
郡平戸島。

のしるし、神力虎に加つて、むつくと起きて身慄ひし、敵に向ひ齒を  
ならし、たけり、うなりて飛びかゝる。「こはかなはじ」と安大人、列卒  
の者がさいたる劍、かりほこ、數槍手に當るを幸に、なげつけなげつ  
け打ちかくる。虎は神力自在をえ、劍を宙にひつくはへひつくは  
へ、岩に打當て微塵になす、刀の光玉ちるあられ、氷を碎くに異なら  
ず。打物つくれば官人ども、色めき立つて逃げまどふ。後より和  
藤内、どつこい遣らぬ。と顯れ出で、安大人がそつ首を擱んでさし上  
げ、くるくると振廻し、えいやつと打ちつくれば、岩に熟柿を打つ如  
く、五體ひしげて失せにけり。此の勢に官人ばら、後へ戻れば惡虎  
の口、先へ行けば和藤内、二王立につつ立つたり。「あゝ、申し御勘忍、  
御免御免」と手を合せ、土に食ひつき泣きゐたり。和藤内虎の脊を  
撫でて、うぬらが小國とて侮る日本人、虎さへ恐がる日本の手なみ  
覺えたか。我こそ音に聞えたる鄭芝龍老一官がせがれ、九州平戸

三世の恩

に成長せし和藤内とは我が事なり。先帝の妹宮、梅檀皇女にめぐ  
り逢ひ、三世の恩を報ぜん爲、父が故郷へたち歸り、國の亂を治むる  
なり。さあ命惜しくば味方につけ、いやといへば虎の餌食、いやか  
おうか。と詰めかくる。「なう何のいやでござりませう。韃靼王に  
従ふも、李踏天に従ふも命が惜しさ。向後おまへの御家來ども、お  
情頼み奉る。」と、地に鼻つけて畏まる。「おゝ、でかしたでかした、さり  
ながら、我が家來になるからは、日本流に月代剃つて元服させ、名も  
改めて召使はん。」と指添の小刀はづさせ、是も當座の早剃刀、母も手  
手に受取つて並ぶ頭の鉢の水、揉むや揉まずに無理むたい、片はし  
剃るやらこぼつやら、絲びんあつびん剃刀次第、またゝく間に剃り  
しまひ、二櫛半のはらけがみ、頭は日本、髭は韃靼、身は唐人、互に顔を  
見合せて、頭ひやつく風引いて、くつさめくつさめ、むらさめむらさ  
め。と涙を流すぞ道理なる。親子どつとうち笑ひ、揃ひも揃つた供

三櫛半  
はらけがみ



廻り、名も日本に改めて、何左衛門、何兵衛、太郎、次郎、十郎、迄、面々が國所、かしら字に名のり、二行に立つてぼつたてろ。「承り候」と、お先手の手ふりの衆、ちやぐちう左衛門、束蒲塞、右衛門、呂宋兵衛、東京兵衛、暹羅太郎、ちやぼ次郎、ちやるなん四郎、ほるなん五郎、うんすん六郎、すんきち九郎、もうる左衛門、ぢやが太郎、兵衛、さんとめ八郎、いざりす兵衛、今參りのお供、先に後、に引き馬、虎斑のこま、母を助けて孝行の、名を取る、口取る、國を取る、譽は異國本朝に、踏みまたげたる鞍あぶみ、虎の脊中にうち乗つて、威勢を千里に顯せり。 —「國姓爺合戦」—

一四 奈須のしの原 源 實朝

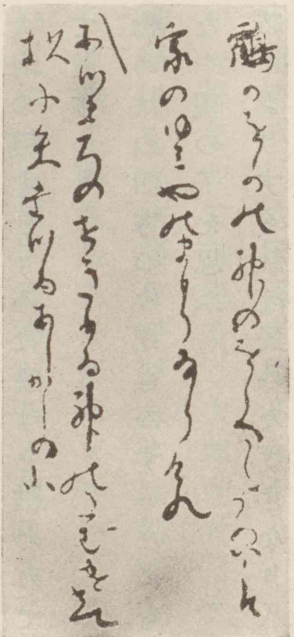
源 實朝 頼朝の第二子、鎌倉第三代將軍、藤原定家に學びて、詠歌に巧なり、承久元年、

このねぬる朝けの風にかをるなり軒端の梅の春の初はなながめつゝ思ふもかなし歸る雁ゆくらんかたの夕ぐれの空

り、承久元年、

ほとゝぎすきけどもあかず橋の花ちる里の五月雨のころ

鶴かをかの神のをしへしよろいこそ家のゆみやのまもりなりけれあつまちのせきもる神のたむけとて松に矢たつるあしからの山



源實朝筆蹟

秋風に夜の更けゆけばひさかたの天の河原に月かたぶきぬ和田の原八重の汐路を飛ぶ雁の翅のなみに秋風ぞ吹くものゝふの矢なみつくろふこての上に霞たばしる



奈須のしの原

おのづから寂しくもあるか山深み苔のいほりの雪  
 の夕ぐれ  
 箱根路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波  
 のよる見ゆ  
 大海の磯もとゞろによする波われてくだけて裂け  
 て散るかも  
 物いはぬ四方のけだものすらだにもあはれなるか  
 なや親の子を思ふ  
 時によりすぐれば民のなげきなり八大龍王雨やめ  
 給へ  
 山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心わがあ  
 らめやも

「金槐集」

一五 附子

主是は此の邊の者で御座る。召使ふ者呼びだいて申し付け  
 る事が御座る。太郎冠者居るかやい。シテはあ。主次郎冠者をも  
 呼べ。シテ畏まつて御座る。次郎冠者召す。次郎冠者心得た。二人兩人  
 共に御前に。主汝等呼びだすは別でもない。某はさる方へ遊  
 山に行く程に、兩人共よう留守をせい。二人畏まつて御座る。主夫  
 について、汝らに預ける物がある程に、夫に待て。二人はあ。主やい  
 やい、是を汝等に預ける程に、よう番をせい。シテして、あれは何でこ  
 ざる。主あれは附子ぢやよ。シテ夫ならば、兩人に一人なあ。次者冠者  
 「中々。二人御供に伺候致しませう。主汝等は何と聞いたぞ。シテあ  
 れが留守ぢやと仰せられまするに依つて、兩人に一人御供に参ら  
 うとの事でござる。主夫は汝らが聞きやうがわるい。あれは附

中々



滅却

子というて、人の身に大毒の物で、あの方から吹く風にあたつてさへ、忽ち滅却する程に、必ず側によらぬ様にして、よう番をせい。シテ

「して、其の大毒の物を、何とて此方にはもて扱ひをなされませうぞ。主不審尤もぢや。あれは主を思ふ物で、其の主が取扱へば何事もなし。餘人が取扱へば其の儘滅却する程に、必ず側へよらぬやうにして番をせい。シテ其の儀ならば。二人畏まつて御座る。主頓て戻らうぞ。二人頓て御歸りなされませい。

シテ「いや、なう、今日は頼うだ人の御留守ぢやに依つて、緩りと居て咄さうぞ。次郎冠者何がさて、緩りと居て咄さうとも。シテ先づ下にをりやれ。次郎冠者心得た。シテ「いや、なう、何と思はしますぞ。何方へ御出なさるゝと有つても、兩人に一人御供に召しつれられぬといふ事はないが、今日は兩人共に御留守に置かせらるゝは、あの附子はよく、大切な物と見えてをりやる。次郎冠者我御料のいふ通

我御料

むざとした事

り、兩人を留守に仰せ付けらるゝは、よく、大事の物と見えてをりやる。シテ「そりやそりやそりや。次郎冠者是は何事でをりやる。シテ「あの方から暖かな風が吹いて來たに依つて、すは滅却する事かと思つて驚いたよ。次郎冠者今のは風ではなかつたよ。シテ夫ならば、ようをりやる。さて某はあの附子をちと見て置かうと思ふ。次郎冠者「はてさて、我御料はむざとした事をおしやる。頼うだ人の仰せらるゝは、其の主が取扱へば何事もなし、餘人が取扱へば、忽ち滅却する。」と仰せられたに依つて、是はいらぬものでをりやる。シテ「其の方のおしやるは尤もなれども、さりながら、自然どなたぞ、そちが處には附子といふ物があると聞いたが、いか様な物ぢや。」と仰せられた時、「いや何とござるをも存ぜぬ。」と申してはいかぢや程に、ちよつと見て置かうと思ふ。次郎冠者我御料のおしやるも尤もなれども、あの方から吹く風に當つてさへ、其の儘滅却すると仰せられた程に、



是は無用にさしませ。シテ「されば其の事ぢや。風にあたれば滅却するに依つて、風にあたらぬ様に、此方からあふぎながら見ようではないか。次郎冠者、あふぎながらか。シテ「中々。次郎冠者、是は一段とようをりやらう。シテ「夫ならば某があふがう程に、我御料紐を解かします。次郎冠者、某は紐を解かう程に、随分あふいで呉れさしませ。シテ「心得た。次郎冠者、あふげく。シテ「あふぐぞく。次郎冠者、解くぞく。シテ「解けく。次郎冠者、さあ解いたは。シテ「出かさしました。序に蓋をも取らします。次郎冠者、某が紐を解いた程に、我御料蓋を取らします。シテ「夫ならば、身どもが蓋を取らう程に、随分あふがします。次郎冠者、心得た。シテ「あふげく。次郎冠者、あふぐぞく。シテ「取るぞく。次郎冠者、取れく。シテ「さあ取つたは。次郎冠者、出かさしました。シテ「先づは、生類では無いと見えた。次郎冠者、夫はなぜに。シテ「生類ならば、其の儘飛んでも出さうな物ぢやが、先づは生類ではないと見えた。次郎冠者、其の

どんみり

聊爾

通りでをりやる。シテ「是からとつくりと見ようではないか。次郎冠者「ようをりやらう。シテ「随分あふがします。次郎冠者、ぬかる事ではない。シテ「あふげく。次郎冠者、あふぐぞく。シテ「あふげく。次郎冠者、あふぐぞく。二人、あふげく。シテ「さあ見たはく。次郎冠者、何と見さしました。シテ「某は白うどんみりと見てをりやる。次郎冠者、身どもは鼠色にどんみりと見てをりやる。シテ「さて、某はあの附子をちと食ひたらなつた。次郎冠者、はてさて、我御料はむざとした事をおしやる。『風に當つてさへ滅却する。』と仰せられた物を、何と聊爾に食はるゝ物ををりやる。シテ「いやく、某は附子に領じられたやら、頻りに食いたう成つた。いで食ふぞ。次郎冠者、これく、先づ待たします。頼うだ人の御留守に凶事が有つては、某一人の迷惑ぢや程に、是はいらぬ物ををりやる。シテ「いやく、苦しいない。はなさします。次郎冠者、某の是に居る内は、やる事はならぬ。いらぬ物ををりやる。



シテ「いや苦しうない。放さしませ。次郎冠者、はてさて、いらぬ物でをりやる。シテはなさしませいといへば。次郎冠者、いらぬ物でをりやる。シテ名残の袖を振りきりて、附子の側にぞ寄りける。次郎冠者、是はいかな事。たつた今に滅却致すでござらう。扱もく、にがくしい事でござる。シテ、さあ、たまらぬはく。次郎冠者、やい、何としたぞ、何としたぞ。シテ、氣遣ひさしますな。うまうてたまらぬ。次郎冠者、何ぢや。うまうてたまらぬ。シテ、中々。次郎冠者、して、何でをりやる。シテ「砂糖でをりやる。次郎冠者、何ぢや。砂糖ぢや。シテ、中々。次郎冠者、どれ、某も舐めて見よう。シテ、我御料も舐めて見さしませ。次郎冠者、まこと、是は砂糖でをりやる。頼うだ人にだまされてをりやる。シテ、いや、なう、其方ひとり舐めずとも、こちへおこさしませ。扱もく、うまい事ぢや。手も離さるゝ事ではない。次郎冠者、いや、なう、其方ひとり舐めずとも、こちへおこさしませ。シテ、是はいかな事。

又どちへ持つていた。いや、なう、其方ひとり舐めずとも、こちへおこさしませ。次郎冠者、又どちへやら。いや、なう、我御料ひとり舐めずとも、こちへおこさしませ。シテ、是はいかな事。又どちへやら持つていた。いや、なう、其方ひとり舐めずとも、こちへおこさしませ。次郎冠者、こちへおこさしませ。シテ、こちへおこさしませ。次郎冠者、こちへおこさしませ。シテ、こちへおこさしませ。

され事

シテ、ほう、よい事をさしました。皆になつてをりやる。次郎冠者、實、皆になつてをりやる。シテ、頼うだ人の御歸りなされたならば、まつ直に申し上げらう。次郎冠者、我御料がねぶりそめて置いて、某の眞直に申し上げる。シテ、是はされ事でをりやる。さて、何とした物であらうぞ。次郎冠者、何としたならばよからうぞ。シテ、先づ下にをりやれ。次郎冠者、心得た。シテ、さてなう、頼うだ人の御歸りなされたならば、何と申し上げた物でをりやらうぞ。次郎冠者、されば、何と申し上げたならば、



むかつな事

ようをりやらうぞ。我御料分別をして見さしませ。シテ「いや、なう  
 なう、よい事を思ひ出した。あの床の掛物を破らしませ。次郎冠者、は  
 てさて、我御料はむかつな事をいふ人ぢや。あの附子を食ふさへ  
 あるに、何と御祕藏の掛物が破らるゝ物ぢや。シテ「いや、言譯の  
 種になる。次郎冠者、夫ならば、破らいて何とする物ぢや、さらゝゝ。  
 シテ「ほう、よい事をさしました、頼うだ人の御歸りなされたならば、其  
 のまゝ申し上げるぞ。次郎冠者、我御料が破れというて、破らせて置い  
 て、某の眞直に申し上げる。シテ「是もざれ言でをりやる。次郎冠者、夫な  
 らば、ようをりやる。シテ「さてあの臺子臺天目をも打割らしませ。  
 次郎冠者「いやなう、我御料氣でもたがひはせぬか。あの御祕藏の掛物  
 を破るさへあるに、何とあの臺子臺天目が打割らるゝ物か。シテ「い  
 やいや、是れ言譯の種になる。某も手つだはう程に、打割らしませ。  
 次郎冠者、夫ならば、打割らいて何とする物ぢや。シテ「くわらり、ちん。次郎

冠者、ちん、くわらりん。二人笑。シテ「みぢんに成つてをりやる。次郎冠者、其  
 の通りでをりやる。シテ「臺子をも踏碎かう。次郎冠者、ようをりやらう。  
 二人「めりゝゝゝゝ。笑。シテ「みぢんになつてをりやる。次郎  
 冠者、其の通りでをりやる。シテ「さて頼うだ人の御歸りなされたなら  
 ば、さめゝゝと泣いて居よう。次郎冠者、なけば濟む事か。シテ「中々、すむ  
 事ぢや、頓て御歸りなされう程に、是に寄つてをりやれ。次郎冠者、こゝ  
 ろ得た。

主、ゆるりと遊山を致いてござる。急いで宿へ歸らうと存ずる。  
 兩人の者どもが待ちかねてゐるでござらう。やいゝゝ、太郎冠者、  
 次郎冠者、戻つたぞ戻つたぞ。シテ「御歸りなされた。泣けゝゝ。次郎  
 冠者、心得た。二人泣く。主、是はいかな事。某の戻つたといふ事を聞  
 いたならば、其の儘飛んでも出さうな物ぢやが。さめゝゝと泣く  
 は何事ぢやぞ。シテ「其方、申し上げさしませ。次郎冠者、我御料申し上げ



さしませ。主、どちらからなりとも、早う言はぬか。シテ、夫ならば、私の申し上げませう。御留守になつてござれば、餘り寂しう成りましたに依つて、次郎冠者が「相撲をとらう。」と申します程に、私は「終にとつた事がない。」と申してござれば、「是非ともに。」と申して、かいなを取つて引立てまするに依つて、夫が迷惑さのまゝ、あの床の掛物に取付いてござれば、あの如くにな。次郎冠者、中々。二人、さけましてござる。泣く。主、是はいかな事。某の祕藏の掛物をあの如くに引裂いて、たゞ置く事ではないぞ。まだあらば早ういへ。シテ、夫より右左へ取つて引廻し、あの臺子、臺天目の上へ、ずていどうと投げられてござるに依つて、あの如くにな。次郎冠者、中々。二人、打割れましてござる。泣く。主、扱もく憎い奴ぢや。臺子、臺天目をもあの如くに打割つて、たゞ置く事ではない。まだあらば早ういへ。シテ、此の上は生けては置かせられまいと存じて、附子をくうて死なうと

かしらかたや

思うてな。次郎冠者、中々。シテ、一口くへども死なれもせず、二口くへどもまだ死なず。シテ、三口、四口。次郎冠者、五くち。二人、十口あまり、みなになる迄くうたれども、死なれぬ事のめでたさよ。あらかしらかたや候。主、なんのおのれ、かしらかたや。二人、眞平ゆるいて下されい。主、あの横着者、人たらし、どちへ行くぞ。捕へて呉れい。やるまいぞ。――「狂言二十番」

一六 百 蟲 譜

横井也 有

蝶の花に飛びかひたる、やさしきものの限りなるべし。それも啼く音の愛なければ、籠コに苦しむ身ならぬこそなほめでたけれ。さてこそ、莊周が夢もこのものには託しけめ。蛙は古今の序に書かれてより、歌よみの部に思はれたるこそ幸なれ。朧月夜の風しづまりて、遠く聞ゆるはよし。古池に飛んで、

横井也 有  
名は時般、尾  
州藩士、伊人、  
天明三年歿、  
年八十二。  
籠コに苦しむ  
一若し鳴かば  
蝶籠コの苦を  
受けん(宗因)



莊周が夢

「莊周、夢爲二胡蝶、栩栩然胡蝶也」莊子

古今の序

「花に鳴く鶯、水に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるものいづれか歌をよまざりける」古今集序文

翁

松尾芭蕉を指す。翁の句「古池や蛙飛込む水の音」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」

「やがて死ぬけしきは見えぬ」



横井りといふべし。

螢はたぐふべきものもなく景物の最上なるべし。水に飛びかひ、草にすたく。

ぞ覺ゆる。然るに貧の學者に捕へられて、油火のかはりにせられたるは、此のものの本意にはあらざるべし。歌に螢火と詠ませざるは、殊の外の不自由なり。俳諧にはその眞似すべからず。

蜀魂

茅蜩は多きもやかましからず。暑さは晝の梢に過ぎて、夕べは草に露おく頃ならん。つくくぼふしといふ蟬は、つくし戀しともいふなり。「筑紫の人の旅に死して、このものになりたり。」と世の諺にいへりけり。あはれは蜀魂の雲に叫ぶにも劣るべからず。蠶の生涯は世のために終り、蜉蝣ははかなき例に引かれ、蓼食ふ蟲は物好の謗となれり。

同じ寶の名に呼ばれて、玉蟲は優しく、黄金蟲は賤し。

蟻は明暮に忙しく、世の營みに隙なき人に似たり。東西に聚散し、餌を求めて止まず。いつか槐安の都を逃れて、その身の安きことを得ん。さるも便あしき方に穴をあけて、千丈の堤を崩すべからず。

蝻螂の瘦せたるも、斧をもちたる誇よりその心いかつなり。人の上にもこの類はあるべし。

槐安の都  
淳于棼が夢に見たる蟻の國。

いかつ



蟹の歩みに譬ふべきものこそなけれ。たゞ、原吉原を駕籠にのりて富士を眺めゆく人には似たり。

促織・鈴蟲・轡蟲はその音の似たるをもて名によべり。松蟲のその木にもよらで、いかでかく名を附きたるならん。毛生ひ、むくつけき蟲にも同じ名ありて、松を枯し、人に疎まる。一在所に二人の八兵衛ありて、一人は後生を願ひ、一人は殺生を事とす。これ松蟲の類なるべし。

蚊は憎むべき限りながら、さすが卯月の頃、端居珍らしき夕べ、始めてほのかに聞きたらん、又は長月のころ力なく残りたるは、寂しき方もあり。蚊帳つりたる家のさま、蚊遣焚く里の煙など、且は風雅の道具ともなれり。藪蚊はことに烈しきを、かの七賢の夜話には、いかに團扇のひまなかりけん。

「鶉衣」

### 一七 藪 醫 者

清盛の醫者ははだかて脈をとり  
うけにんを呼べと松下せきにせき  
佐野の馬戸塚の坂で二度ころび  
外科へ行く鼎は途の判じもの  
つれますかなどと文王そばへより  
おつかさんまた越すのかと孟子いひ  
諫めると穴だと始皇おどすなり  
寝忘れた下女はやたらに薪をくべ  
寢所をへし折つて置くひとりもの  
かみなりをまねて腹かけやつとさせ  
國の母生れた文をだき歩き



毎夜出て人をつかんで食ふ按摩  
約束をちがへぬ紺屋あはれなり  
もり殺すので藪醫者も名が高し  
よつ引いてひやうと放さぬ案山子かな

「柳樽」

一八 四季のあはれ

兼好法師

兼好法師  
俗姓下部、後  
宇多天皇に仕  
へしが後出家  
す、正平五年  
寂、年六十八。  
物のあはれは  
「春はたゞ花の  
一重に咲くば  
かり物のあは  
れは秋ぞまさ  
れる」拾遺集  
讀人知らず

をりふしの移り變ること物ごとにあはれなれ。物<sup>\*</sup>のあはれは  
秋こそまされ。と人ごとに云ふめれど、それもさるものにて、今ひと  
きは心も浮きたつものは、春の氣色にこそあめれ。鳥の聲なども、  
ことの外に春めきて、のどやかなる日影に、垣根の草萌えいづる頃  
より、やゝ春深く霞みわたりて、花もやう／＼氣色立つ程こそあれ、  
折しも雨風うち續きて、心あわたゞしく散りすぎぬ。青葉になり  
行くまで、よろづにたゞ心をのみぞ惱ます。花<sup>\*</sup>橘は名にこそ負へ

花橘は云々  
「五月待つ花  
橘の香をかげ  
ば昔の人の袖  
の香ぞする」  
古今集、讀人  
知らず

灌佛  
陰曆四月八  
日、釋迦降誕  
日に行ふ法  
會。

陰曆四月中の  
酉の日に行は  
るゝ賀茂の葵  
祭。

あぢきなし

れ、なほ梅の匂にぞいにしへの事もたちかへり、戀しう思出でらる  
る。山吹の清げに、藤のおぼつかなきさましたる、すべて思ひ棄て  
がたき事多し。灌<sup>\*</sup>佛の頃、祭<sup>\*</sup>の頃、若葉の梢涼しげに、茂り行く程こ  
そ、世のあはれも人のこひしさもまされ。と、人の仰せられしこそ、げ  
にさるものなれ。五月あやめふく頃、早苗とる頃、水鶏のたゞくな  
ど、心細からぬかは。六月の頃、あやしき家に、夕顔の白く見えて、蚊  
遣火ふすぶるもあはれなり。六月祓又をかし。七夕祭ることそな  
まめかしけれ。やう／＼夜寒になるほど、雁鳴きて來る頃、萩の下  
葉色づくほど、わさ田刈りほすなど、とりあつめたる事は秋のみぞ  
多かる。又野分の朝こそをかしけれ。いひ續くれば、皆源氏物語  
枕草子などに事ふりにたれど、同じ事また今更にいはいはじにもあ  
らず。思しき事はぬは、腹ふくるゝわざなれば、筆に任せつゝ、あ  
ぢきなきすさびにて、かいやり棄つべきものなれば、人の見るべき



にもあらず。

さて冬枯のけしきこそ、秋にはをさ／＼おとるまじけれ。汀の草に紅葉の散りとゞまりて、霜いと白うおける朝、遣水より煙の立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人毎にいそぎあへる頃ぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして、見る人もなき月の、寒けく澄める廿日餘りの空こそ心細きものなれ。御佛名、荷前の使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事ども繁く、春のいそぎにとりかさねて催し行はるゝさまぞいみじきや。

すさまじ

追儼

十二月晦日の夜、宮中にて疫鬼を拂ふ式。

追儼より四方拜につゞくこそおもしろけれ。つごもりの夜、いたう暗きに、まつどもともして、夜半過ぐるまで人の門たゞき走り歩きて、何事にかあらん、こと／＼しくのゝしりて、足を空に惑ふが、曉方よりさすがに音なくなりぬるこそ、年のなごりも心細けれ。亡き人の來る夜とて、魂祭るわざは此の頃都にはなきを、東の方に

は、猶する事にて有りしこそあはれなりしか。かくて明けゆく空のけしき、昨日に變りたりとは見えねど、ひきかへ珍らしき心地ぞする。大路のさま、松立てわたして、花やかに嬉しげなるこそ又あはれなれ。

「徒然草」

一九 現代生活と古典

大類 伸

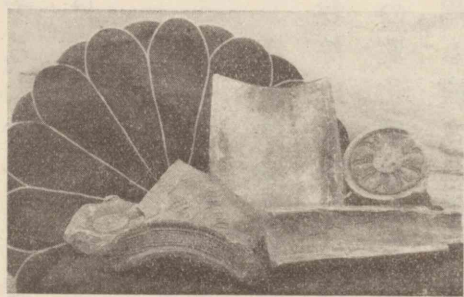
現代は餘りに目眩しい、餘りに餘裕がない。都會裡に生活する我等に取つては殊にさうである。經濟の權威の前に跪いた現代の文化は、餘りに窮屈なものとなつて了つた。猫額大の土地も利用し盡され、無住、無主の土地がないやうになつた現代から考へると、今私の眼前に展開されて居る廣袤數町に互る地域に營まれた武藏國國分寺の大伽藍は、餘りに不經濟である。無用の土木を興したとの非難も起つて來よう。併し、それは大海を知らない井蛙

廣袤

大類 伸  
東京市の人、  
歴史家、文學  
博士、東北帝  
國大學教授、  
明治十七年  
生。



の見てある。千年の昔、其處には大きな古典の世界があつた。縦令民主や平等の聲は聞かれなかつたとしても、或偉大な勢力の支配があつた。これを専制と罵り、一部階級の特權獨占と嘲る者が



武藏國分寺古瓦

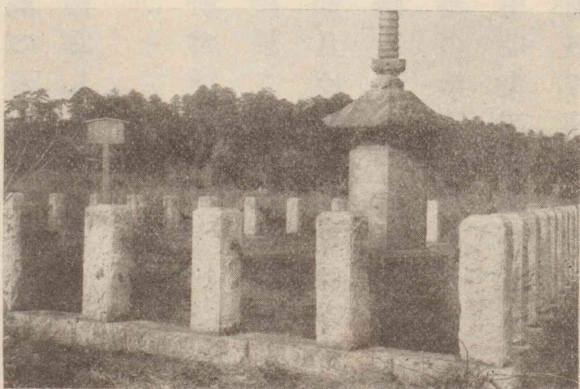
あらうとも、古典の世界は確かに偉大であつた。如今經濟の觀念は民主平等の思想と相提携して、偉大な世界を破壊して了つた。餘裕のあつた大きな世界は、徹底的な併し窮屈な思想の爲に壓倒されて了つた。誰がそれを惜しまないであらう。

私は決して現代を千年の昔に還さうとは思はない。併し、千年の後までも我等の前に遺された此の寺の瓦の破片、此の大きな礎石、乃至此の廣い遺址は、抑、何を私共に語つて居るだらうか。思ふに、彼等は何れも千

命數

ニーチエ  
Friedrich  
Wilhelm  
Nietzsche.  
獨逸の哲學  
者詩人。(西  
曆一八四四—一九〇〇)

年以前の國分寺隆盛の當時を再現してくれとは叫んでゐないだらう。否、没落と破壊と千年の歲月が齎した運命とを、當然の命數だと甘んじて受けて居るだらう。只彼等は彼等を造つた千年前の人間——それは、我等の祖先——を忘れてくれるなと我等に要求して居るだらう。私はそれに相違ないと思ふ。彼等は土地と生活とに餘裕があつたと共に、思想にも餘裕に富んだ、古典の人々が生みだした餘裕の偉大さを示した其の文化を尊重して居るではあるまいか。惡平等と凡庸跋扈の時代に在つては、<sup>\*</sup>ニーチエでなくとも超人を思はずには居られない。現代



武藏國分寺舊址



生活に取つては、古典と餘裕とは缺くことの出来ない要素である。私は、瓦の破片の散亂した、巨大な礎石の點々存在する、此の廣い國分寺の廢墟に立つて、うたゝ千年以前の人間に一層の親しさを感ぜざるを得ないのである。  
「歴史と自然と人」

## 二〇 日本往古の圖書館 新村 出

圖書館事業の進歩しつゝある現代に於て、過去の圖書館を一瞥するの、古書保存上反省の料ともなり、且は歴史的興味を喚起し、萬更無益ではなからう。紙魚の害を始め、浸水盜難其の他人事を盡さず、放擲に任す結果より生ずる書籍の散逸は別として、兵燹其の他の火災に因つて、書籍を亡失した事は、東西に史上其の例數へるに違ない程であり、我が國だけでも、有名な事件として後世に傳へてある場合は随分多い。

新村 出  
靜岡縣の人、  
言語學者、文  
學博士、京都  
帝國大學教  
授、附屬圖書  
館長、明治九  
年生。  
兵燹

インスクリプ  
ション  
Inscription.  
名山石室

アッシリヤ  
Assyria.  
アッスルバニ  
バル  
Assurbanit-  
pal.  
(西紀前六六六  
前五六六)

バラチヌ  
Palatine.  
アウグスツス  
Augustus.  
(西紀前六三前  
一七)

中國及び西土の如く、夙に文字の開けた國々では、金石文として、  
\*インスクリプションとして、何千年の後まで一種の書籍を遺すわ  
けであるが、西土の舊國では、圖書館が言はば名山石室の類の建築  
であつたから、其の構造の實地をも見ることが出来るばかりでな  
くて、其の中の金石文の書籍が數千年後の今日に残る様な仕合が  
ある。\*アッシリヤの古都の墟より發掘したる\*アッスルバニバル  
王の書庫から、幾多の煉瓦様の刻本を發見した事は、考古學上最も  
著名な事件であつて、今日倫敦の大英博物館に陳列して、普く人の  
知る所である。

其の他、埃及・希臘羅馬の故土に於て、廢址より圖書館の遺墟を掘  
出した事例は、此の半世紀程の間に數多ある。羅馬に遊んで、\*バラ  
チヌ丘を訪ひ、\*アウグスツス帝の大内裏の迹を尋ねた讀書子は、帝  
室の有名な圖書寮の廢墟に佇立して、低回去るに忍びなかつたて

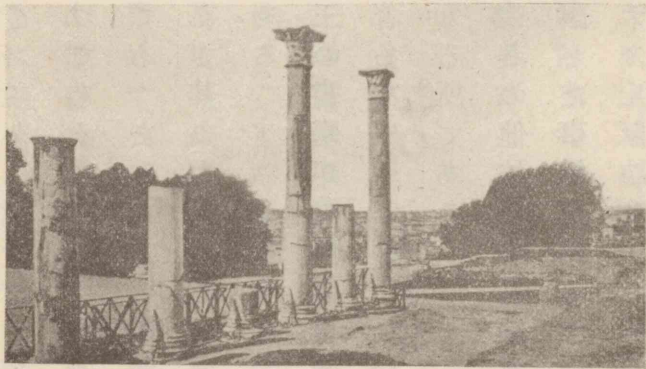


エフエーソス  
Ephesus.  
古代小アジア  
の商業の中心  
地。

ポンペイ  
Pompeii.  
上古、南イタ  
リヤに在りし  
町の名。

燉煌  
支那、甘肅省、  
燉煌縣城の東  
南四里の處に  
在り。

烏有



馬羅巴チラ丘上ウアグスツス帝宮文庫の遺址

あらう。併し其等の遺蹟に由つて、古代圖書館の構造は略推知されるけれど、金石以外の然るべき書類は如何とも爲し難い。エフエーソスやポンペイにしても、又は中亞の燉煌の石室にしても、せられ、近時有名な燉煌の石室にしても、本來の文庫や、假の設備は段々世の光に浴し、圖書館史上の資料を供すること益多くなつて來た。唯木造の建築物に至つては、失火に對して、手の施し様も無かつたと見えて、官私の文庫が災に罹つて、珍籍の烏有に歸した例は、我が國の圖書館史上に頗る頻繁である。

近江志賀の都に於ける天智帝創設の大學に對し、別に大内裏に

嚙矢

藤原武智麿  
不比等の子、  
元明・元正・聖  
武三朝に歴仕  
す、天平九年  
歿、年五十八。

藤原宮

持統・文武二  
朝の皇居、そ  
の趾は奈良縣  
高市郡大原村  
の地に位す。

石上宅嗣

乙麿の子、天  
應元年歿、年  
五十三。  
外典

圖書館の設置もあつたらうが、國書及び之に附隨する事項の施設は、先づ大寶令に於ける中務省管下の圖書館の制度を以て嚙矢として差支あるまい。併し藤原奈良二京の圖書館も、やはり内裏京坊と其の運命を同じうしたと云ふ丈で、何等も傳はらぬけれど、藤原武智麿が和銅元年三月大學頭より圖書頭に遷り、侍從兼任の傍奉仕の間々に圖書經籍を檢校し、官書のあるひは卷軸の零落し、あるひは部帙の缺損したものなどの多いのを慨き、奏請して民間を尋訪し、寫し取つて補充した事蹟は、斯道の歴史に於て、特筆大書せねばならぬ。武智麿は、之より先き、車駕の新京藤原宮に移られて後、學校の頽廢を歎じ、興學に力をつくしたのであつた。

平城京に於ける集書寫書及び藏書の業は、茲に細説するを省くが、天平時代の末期に、文人として名を馳せた石上宅嗣が、其の舊宅を捨して阿闍寺とし、寺内の一隅に於て、外典の院を置いて、芸亭と



覺地  
權輿

淡海三船  
淳仁より桓武  
に至る四朝に  
歴仕し、大學  
頭兼文章博士  
となり、なほ  
因幡守、刑部  
卿をも兼ね、  
延暦四年歿、  
年六十四。

滋野貞主  
儒者、嵯峨よ  
り文徳に至る  
四朝に歴仕  
す、仁壽二年  
歿、年六十八。

拾芥抄  
全六卷、一名  
略要抄、藤原  
實熙編著。

祕閣

藤原佐世  
清和より宇多  
に至る四朝に  
歴仕し、大學  
頭、陸奥守を  
經て右大將に  
至る、昌泰元  
年歿、年未詳。

名づけ、好學の徒の自由閱覽を許し、趣意書の様なものを掲げて、讀書家が内外二典に通じて、覺地に歸すべき由を示した事は、我が國に於ける公開圖書館の權輿とも稱すべきもので、續日本紀編纂の延暦年代までは尙舊都に存したと云ふ話である。創立者たる宅嗣は、經國集に詩賦一首と萬葉集に短歌一首とが今に残る丈であるが、淡海三船と文名を等しうした一代の名流であつた。和氣清麿の長子廣世は、醫科大學長ともいふべき典藥頭より大學別當に轉じ、後私宅を以て弘文院といふ我が國最初の私學に充て、内外二典數千卷を藏めて、附屬の文庫を設置した。是は其の伯母法均尼の養育院事業と共に、和氣氏が時流に卓越する考を有つて居た事を知るに足るものである。

史上平安京に於ける圖書事業は、之を初めとして、傳ふべき零碎な事柄は、拾ひ集めようとすればなほ拾ひ集められる。中には頗

る著名な事實もある。圖書寮にては、弘仁中、滋野貞主の如き名家を圖書頭に戴いた。祕府略千卷、經國集二十卷を編し、西寺の南なる自邸を捨てて慈恩寺となし、文庫亦一世に名高かつたと傳へられる。圖書寮は元慶七年及び萬壽四年、其の間相隔つる殆ど百五十年、二回焼亡に逢うて、平安朝の末期に及ぶ。拾芥抄によれば、中世圖書町の名に残り、元は内裏の西北に在つた。今の一條南千本西の位置で、二條停車場附近を遺跡とする大學寮とは、稍對角線的に相離れて居たのである。圖書寮の焼けた元慶七年より遡ること八年、後院として名高い冷泉院が焼け、祕閣の收藏する帝室圖書文書が灰燼となつた。院の五十四宇を延焼し、翌日も火が衰へず、剩つさへ防火者中死人が出来たと云ふ位の慘さであつた。此の火災は、圖書事業には望外の結果を生じ、當代俊才の藤原佐世を態、陸奥三界から召還して、寛平年中に至つて、日本國見在書目を編纂



日野資業  
永承六年出家  
す、法名素舜、  
延久二年歿、  
年八十三。

頼長  
藤原頼長、山  
城國宇治に住  
し、且人とな  
り嚴酷なりし  
より時人宇治  
悪左府と呼べ  
り。

させる次第になつた。

冷泉院が焼けてから百八十年程経て、文章博士や式部大輔になつた日野資業が、永承三年醍醐に法界寺を建てた。其の法界寺文庫の名や、更に百有餘年を経て後白河院の建てられた蓮華王院(十三間堂)中の文庫、蓮華王院

日本國見在書目録

合次家

正五位下行陸奥守兼上野権介藤原朝経

奉勅撰

易家<sup>二</sup>尚書<sup>三</sup>、詩<sup>四</sup>、禮<sup>五</sup>、樂<sup>六</sup>、春秋<sup>七</sup>、孝經<sup>八</sup>、論語<sup>九</sup>、典説<sup>十</sup>、小學<sup>十一</sup>、正史<sup>十二</sup>、首史<sup>十三</sup>、雜史<sup>十四</sup>、西朝史

日本國見在書目録第一葉

十三間堂)中の文庫、蓮華王院寶藏の名なども、古書家の間には傳はるが、文庫としての價值は其の頃如何なるものであつたか

王朝時代に於ける私人の文庫の建築で、相當に念を入れて造り、又比較的詳密に模様を知れて居るのは、恐らく宇治悪左府頼長が天養二年造り了つた文倉であらう。高さ一丈二尺、東西二丈三尺、南北一丈二尺と云ふ今では

台記

日次記とも云ふ、頼長が二十一歳より三十六歳に至る十餘年間の日記。

藤原通憲

鳥羽、近衛崇徳三朝に歴仕し、少納言に至る、後雅斐して信西と稱す、平治元年歿、年未詳。

江家文庫

大江匡房の建てし書庫。

大江匡房

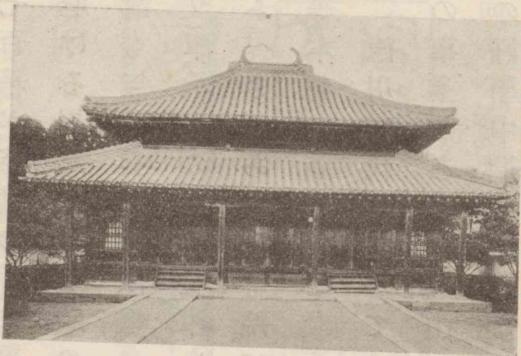
後三條、白河、堀河三朝に歴仕し、權中納言に至る、和歌をよくし、殊に詩文を以て世に著る、前記三朝の帝師たり、天永二年歿、年七十

何でも無い規模の書室であるが、瓦葺にして、周囲の板に石灰を塗り、外部に垣や溝を設けた様な制も、一つには火災を恐れた爲であらう。文倉の制と收書の式と共に台記に委しい。台記に由ると、頼長は、前記日本見在書目の編者佐世の著述の、而も自筆本を借りて「無二の珍寶」と喜んだ話があるし、又彼は通憲入道藏書目録として群書類従にも載つて居る有名な書目の編者たる藤原通憲(信西)の門人であつて、共に當時に在つて學才もあり、名高い藏書家であつたが、保元平治の兩亂に相續いて悲惨な運命に陥つた。而して保元亂に先だつ事數年、宇治の文庫設置後又十年ならずして、仁平の三年、江家十代の書倉として、日域亡びずんば、此の書亡びず」と傲語した樋口南西洞院東なる江家文庫の焼けたことは、當代の記録に、是朝之遺恨、人々愁悶也」と見ゆる通りで、冷泉院以後の圖書館界の大出來事であつたに違ひない。頼長の父忠實が大江山匡房に向



つて、火災の恐るべき由を注意したらば、匡房は「日本國亡びずば、此の書ども滅びず」と氣焰を吐いた。といふ事が、頼長の日記に見えてゐる。治承元年の大火に洛中灰燼となるに至つた以前、京の花とでも云ひたい程、頻りに起る火事沙汰に、書庫の災を被つた事も度重り、宇治左府の如き用意も段々必要になつて來た。

鎌倉に於ては、承元二年三善善信の文庫が燒亡して、累代の文書灰燼に歸し、善信は、愁歎の餘り落涙數行、心神爲に惘然とした。といふ吾妻鏡の記事に由るに、將軍家の文籍其の他貴重の記録類を藏して保管してあつた此の善信の文庫は、殊更に邸後の山際に設けてあつたのであるが、延燒の災を免れ得なかつたのである。同代稍下りて、金澤文庫の創設の如きも、元亨年中の稱名寺古圖に就いて見れば、地域、他の堂舎を隔離して、災を防ぐ注意をしたのみならず、傳ふる所に由ると、土倉を造つて藏書庫としたとさへ云ふ。金



利學聖廟

澤文庫、利學學校の文庫が幸に東國の僻土に在つて後世に至る迄存留し、今日其の藏書の集散の別こそあれ、尙之を覽ることの出來るのは、地勢にも由るが、一つには王朝以來積年の經驗にも基いて、一入保管の責を果した爲とも見られる。

京師に在つても、洛外の寺院は災を免るゝ事は洛中よりも都合よく、又書物の散亡を防ぐ事も割合に出來易かつたのは當然だ。例へば、今日洛外の遠近の眞言宗の諸寺院などが、高野に、石山に、醍醐に、梅尾に、東寺に、稀觀の典籍を保存して居るのも、五山十刹、其の他の禪刹が、主として足利時代に於ける特殊の地位より、自然收藏するに至つた内外の古書などを數多く藏

稀觀



一 條兼良  
關白藤原經嗣の子、後小松稱光・後花園後土御門の四朝に歴仕し、關白に至る、博學多識を以て著る、文明十三年歿、年八十。

清原業忠  
儒者、後花園天皇の時大藏卿たり、歿年未詳。

三 要  
足利學校第九代の庠主、家康に召され、伏見圓光寺學校の主宰となる。

するものも、一に地勢、二に保管法、三に好學の徒の留意に基くものである。併し應仁の大亂に當つて、桃花坊に於ける一<sup>\*</sup>條兼良の藏書七百箱が、盜賊の手に罹つて、悉く棄却された災厄といひ、豫め災を避ける用意に、西嵯峨の墳寺に藏した清原業忠の史書數十車が、一遺も無く兵燹の餘燼に焼けて仕舞つた禍といひ、共に仁平の江家文庫、承元の三善文庫などの焼亡と同じく、圖書界の一大厄難といふべきである。寺院に在つては、一切經の收藏存亡と經藏の設備等、本邦の圖書館事業上、記載すべき點が甚だ多い。

徳川時代に至つては、初期には家康の興學に伴ふ集書寫書、刊書の事業があつて、五山の緇流に出る三<sup>\*</sup>要や羅山の功績、紀尾兩藩侯の好學、中期にしては、水戸加賀兩名君の圖書事業などに關しては、縷述する迄もない。江戸に於ては、上に紅葉山文庫の創設あり、下に板坂卜齋の淺草文庫の建設されたのも、幕初を下らぬ。林家の

書庫が明曆の大火に烏有に歸した厄年に先だつ事、幾何もなき頃、伊勢に豐宮崎文庫の創置あり、外宮禰宜度會氏の發起による。三十四年後れて、林崎文庫の設立が宇治の年寄の發起で出來たのな



ど、文庫事業の進歩は著しい。淺草文庫は姑く措き、他の存続した名庫も、今日は既に廢れて仕舞つたが、其の建物や内部の模様等は成るべく詳細に録して、後世に残したいものである。昌平坂學問所の書庫と林家累代の事蹟とは、青木昆陽



や近藤正齋の御書物奉行としての圖書事業と共に、餘りに名高いから單に列擧するに留め、其の他の藏書家及び諸文庫の事は煩を避けて省略しよう。圖書の寄贈に至つては、今井似閑の加茂御手水、文庫に於ける、村井古巖の林崎文庫に於ける、共に京都の民なる



瑣談

こと、殊に村井氏の商賈に出でたる事は、最も注目すべきである。以上もとより本邦圖書館事業の瑣談の羅列に過ぎずして、歴史の體を備へないけれども、古書保存の業に、先人が如何程力を盡したかと云ふ徑路の大要を通ずることは、出来るだらうと思ふ。其の間幾度文庫が災厄に遭ひ、良書が烏有に歸したかと云ふ事を知れば、此等の難を逃れて幸に傳はつた書物の如何に尊重すべきか、又如何に心を盡して保管すべきか、且如何に古書の採訪謄寫等に力を盡すの要あるかを察し得るのである。

「典籍叢談」

二二 春寒し

夏目漱石

夏目漱石  
名は金之助、  
東京市の人、  
文學者、大正  
五年歿、年五  
十。

汽車は流星の疾きに、二百里の春をつらぬいて、行く我を七條のプラットフォームの上に振落す。余が踵の、堅き叩に薄寒く響いた時、黒きものは黒き咽喉から火の粉をばつと吐いて、暗い國へ轟

プラットフォーム  
Platform.

と去つた。

たゞさへ京は寂しい所である。原に眞葛、川に賀茂、山に比叡と愛宕と鞍馬ことゝく昔のまゝの原と川と山とである。昔のまゝの原と川と山との間にある一條二條三條をつくして、九條に至つても十條に至つても、皆昔のまゝである。數へて百條に至り、生きて千年に至るとも、京は依然として寂しからう。此の寂しい京を春寒の宵に疾く走る汽車から、會釋なく振落された余は、寂しいながら、寒いながら、通らねばならぬ。南から北へ——町が盡きて、燈が盡きる北の果まで通らねばならぬ。

「遠いよ。」と主人が後からいふ。「遠いぜ。」と居士が前からいふ。余は中の車に乗つて顛へてゐる。東京を立つ時は、日本にこんな寒い所があるとは思はなかつた。昨日迄は、擦れあふ身體から火花が出て、むく／＼と血管を無理に越す熱き血が、汗を吹いて總身に



倏忽

にじみ出はせぬかと感じた。東京はさ程に烈しい所である。此の刺戟の強い都を去つて、突然と太古の京へ飛下りた余は、恰も三伏の日に照りつけられた焼石が、緑の底に空を映さぬ暗い池へ落ち込んだやうなものだ。余はしゆつといふ音と共に、倏忽と我を去る熱氣が、静かなる京の夜に、震動を起しはせぬかと心配した。「遠いよ。」といった人の車と、「遠いぜ。」といった人の車と、顫へてゐる余の車とは、長い轅を長く連ねて、狭く細い路を北へ北へと行く。静かな夜を、聞かざるかと輪を鳴らして行く。鳴る音はかん、からんといふ。陰氣な音ではない。然し寒い響である。風は北から吹く。

細い路を窮屈に兩側から仕切る家は悉く黒い。戸は残りなく鎖されてゐる。所々の軒下に、大きな小田原提燈が見える。赤くせんざいと書いてある。人氣のない軒下に、せんざいはそもく

何を待ちつゝ、赤く染まつてゐるのか知らん。

前なる居士は黙つて乗つてゐる。後なる主人も言葉をかけるけしきが無い。車夫はたゞ細長い通を何處迄も、かん、からんと北へ走る。なる程遠い。遠い程風に當らねばならぬ。馳ける程顫へねばならぬ。余の膝掛と洋傘とは、余が汽車から振落された時、居士が拾つてしまった。洋傘は拾はれても、雨が降らねばいらぬ。此の寒いのに膝掛を拾はれては、東京を出る時、二十二圓五十錢を奮發したかひがない。

かん、かららんは長い橋の袂を左へ切れて、長い橋を一つ渡つて、ほのかに見える白い河原を越えて、藁葺とも思はれる不揃な家の間を通り抜けて、梶棒を横に切つたと思つたら、四抱へも五抱へもある大樹の幾本となく提燈の火にうつる鼻先で、びたりと留つた。寒い町を通り抜けて、よくく寒い所へ來たのである。遙かなる



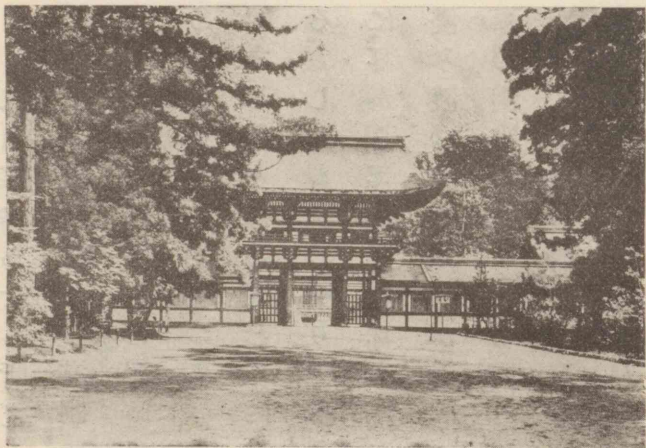
料峭

頭の上に見上げる空は、枝の爲に遮られて、手の平程の奥に料峭たる星の影がきらりと光を放つた時、余は車を降りながら、元來何處へ寝るのだらうと考へた。

「是が賀茂の森だ。」と主人がいふ。「賀茂の森が我々の庭だ。」と居士がいふ。大樹を繞つて逆に戻ると、玄關に燈が見える。なる程家があるなと氣がついた。

會下

玄關に待つ野明さんは坊主頭である。臺所から首を出した爺さんも坊主頭である。主人は哲學者である。居士は洪川和尚の會下である。さうして家は森の中にある。後は竹藪である。顫へながら飛込んだ客は寒がりである。若い坊さんが「御湯におはいり。」といふ。主人と居士は、余が顫へてゐるのを見かねて、公、まづはいれ。」といふ。賀茂の水の透徹るなかに、全身を浸けた時は、齒の根があはぬ位であつた。湯に入つて



顫へたものは、古往今來澤山あるまいと思ふ。湯から出たら、公、先

づ眠れ。」といふ。若い坊さんが厚い

蒲團を十二疊の部屋に擔ぎ込む。

「郡内か。」と聞いたたら、太織だ。」と答へた。

「公の爲に新調したのだ。」と説明があ

る上は安心して、我がものと心得て

の差支なしと考へた故、御免を蒙つて

寝る。

森 寝心地は頗る嬉しかつたが、上に

掛ける二枚も、下へ敷く二枚も悉く

蒲團なので、肩のあたりへ糺の森の

風がひやりひやりと吹いて來る。

車に寒く、湯に寒く、果は蒲團に迄寒かつたのは心得ぬ。京都では



袖のある夜着はつくらぬものの由を主人から承つて、京都はよくよく人を寒がらせる所だと思ふ。

眞夜中頃に、枕頭の違棚に据ゑてある四角の紫檀製の棹に嵌めこまれた十八世紀の置時計が、チーンと銀椀を象牙の箸で打つやうな音を立てて鳴つた。夢のうちに此の響を聞いて、はつと眼を醒ましたら、時計はとくに鳴りやんだが、頭のなかはまだ鳴つてゐる。しかも其の鳴り方が次第に細く、次第に遠く、次第にこまやかに、耳から耳の奥へ、耳の奥から腦のなかへ、腦のなかから心の底へ浸み渡つて、心の底から心のつながる所で、しかも心の尾いて行く事の出来ぬ遐かなる國へ、抜けだして行くやうに思はれた。此の涼しき鈴の音が、我が肉體を貫いて、我が心を透かして、無限の幽境に赴くからは、身も魂も氷盤の如く清く、雪甌の如く冷かたなくてはならぬ。太織の夜具のなかなる余は愈、寒かつた。

氷盤  
雪甌

依稀

曉は高い樺の梢に鳴く鳥で、再度の夢を破られた。此の鳥は、かあとは鳴かぬ。きやけえ、くうと曲折して鳴く。單純なる鳥ではない。への字鳥くの字鳥である。賀茂の明神がかく鳴かしめて、うき我をいとゞ寒がらしめ給ふの神意かも知れぬ。

かくして太織の蒲團を離れたる余は、顛へつゝ窓を開けば、依稀たる細雨は濃やかに糺の森を罩めて、糺の森は我が家を遶りて、我が家の寂然たる十二疊は我を封じて、余は幾重ともなく寒いものにとり圍まれて居た。

春寒の社頭に鶴を夢みけり

「漱石全集」

## 二二 天の香具山

太上天皇

春のはじめのうた

太上天皇  
後鳥羽上皇。



ほのくくと春こそ空に來にけらし天の香具山霞た  
なびく

和歌所にて關路鶯といふことを

鶯の鳴けどもいまだ降る雪に杉の葉しろきあふさ  
かの山

十月ばかり水無瀬に侍りし頃前大僧正慈

圓のもとへぬれて時雨のなど申し遣して、

つぎの年の神無月無常の歌あまたよみて

遣し侍りし中に

思ひいづるをりたく柴の夕煙むせぶもうれし忘れ  
がたみに

春立つ心をよみ侍りける

後京極攝政太政大臣

後京極攝政太  
政大臣

藤原良經、關  
白兼實の子、  
建永元年歿、  
年三十八。

みよし野は山も霞みて白雪のふりにし里に春は來  
にけり

五十首歌奉りし時

雲はみなはらひはてたる秋風を松にのこして月を  
見るかな

世中よみちこ  
そなけれおも  
ひいるやまの  
なかにもしか  
そなくなる

世中よみちこ

そなけれおも

ひいるやまの

なかにもしか

そなくなる

藤原定家筆蹟

和歌所歌合に關路秋

風といふ事を

人住まぬ不破の關屋の板び

さし荒れにし後はたゞ秋の

かぜ

藤原定家

守覺法親王に奉りける五十首歌に

大空は梅のにほひに霞みつゝ曇りもはてぬ春の夜

藤原定家  
俊成の子、新  
古今集・新勅  
撰集の撰者、  
仁治二年歿、  
年八十。



霜まよふ空にしをれし雁がねのかへるつばさに春  
雨ぞ降る

冬日於切目王子詠二首和歌

正五位下上總介藤原朝臣家隆上

遠山落葉

ふるさとはまたしくらしまさきちるみやまのあられ  
いろかはるなり

藤原家隆筆蹟

旅の歌とてよめる  
旅人の袖ふきかへす秋  
風に夕日さびしき山の  
かけはし

藤原家隆

藤原家隆 中納言光隆の子、定家と共に當代の歌聖と稱せらる、新古今集の撰者、嘉禎三年歿、年八十。

梅が香に昔をとへば春の月答へぬ影ぞそでにうつ  
れる  
いかにせん來ぬ夜あまたの時鳥またじと思へば村  
雨のそら

藤原雅經

頼經の子、家を飛鳥井と稱す、新古今集の撰者、承久三年歿、年五十二。

攝政太政大臣家歌合に湖上冬月、  
志賀の浦や遠ざかり行く波間より氷りて出づる有  
明の月

藤原雅經

五十首歌奉りし時  
尋ね來て花にくらせる木の間より待つとしもなき  
山の端の月  
擣衣の心を  
みよし野の山のあきかぜさ夜更けて故里さむく衣  
うつなり

藤原有家

藤原有家 大貳重家の子、新古今集の撰者、建保四年歿、年六十二。

攝政太政大臣家百首歌合に  
風わたる淺茅が末の露にだにやどりもはてぬ宵の



源 通具

内大臣通親の子、新古今集の撰者、安貞元年歿、年五十八。

いなづま

千五百番歌合に

源 通具

梅の花たが袖ふれしにほひぞと春やむかしの月に

とはゞや

式子内親王

式子内親王

後白河院の皇女、和歌・繪畫を能くす、賀茂齋院となり、三宮に准ぜらる、建仁元年薨、御年未詳。

百首歌奉りし時春のうた

山ふかみ春とも知らぬ松の戸にたえくかゝる雪

の玉水

齋院に侍りける時、神だちにて

わすれめやあふひを草にひき結びかりねの野べの

露のあけぼの

藤原俊成

藤原俊成

中納言俊忠の子、千載和歌集の撰者、元久元年歿、年九十一。

入道前關白右大臣に侍りける時、百首歌よ

ませ侍りける時、ほとゝぎすの歌

むかし思ふ草の庵のよるのあめに涙なそへそ山ほと

とゝぎす

守覺法親王五十首歌よませ侍りけるに

雪ふれば嶺のまさかきうづもれて月にみがける天

のかぐ山

定家朝臣の母身まかりて後、秋の頃墓所近

き堂にとまりてよみ侍りける

まれに來る夜半も悲しき松風を絶えずや苔の下に

きくらん

藤原秀能

夕月夜しほみちくらし難波江の蘆の若葉を越ゆる

藤原秀能  
後鳥羽院の北面に伺候す、仁治元年歿、年五十七。



源三位頼政

治承亂の首領、治承四年宇治平等院に自刃す、年七十餘。

白浪

源三位頼政

夏月をよめる

庭の面はまだかわかぬに夕立の空さりげなく澄める月かな

今宵たれすゝ吹く風を身にしめて吉野の嶽に月を見るらん

藤原清輔

續詞花集の撰者、治承元年歿、年未詳。

藤原清輔

柴の戸に入日の影はさしながらいかにしぐるゝ山べなるらん

宮内卿

右京大夫師光の女、後鳥羽天皇に仕へし宮女、歿年未詳。

宮内卿

五十首歌奉りし中に、湖上花を

花さそふ比良の山風吹きにけり漕ぎゆく舟のあと

見ゆるまで

八月十五夜和歌所歌合に、海邊秋月といふ

ことを

心あるをじまの海士の袂かな月やどれとはぬれぬ

ものから

鴨長明

鴨長明

山城國賀茂社氏人、和歌所寄人、雄髪して、運胤と稱す、建保四年歿、年六十三。

鴨社の歌合とて人々歌よみ侍りけるに月を

石川や瀬見の小川の清ければ月も流れをたづねて

ぞすむ

能因法師

能因法師

俗名長門守橘永愷、又世に古曾部入道と稱せらる、歿年未詳。

みちのくににまかりける時よみ侍りける

夕されば汐風こしてみちのくの野田の玉川千鳥鳴

くなり



寂蓮法師  
俗名藤原定長、建仁二年寂、年未詳。

五十首歌奉りし時  
むらさめの露もまだひぬ慎の葉に霧たちのぼる秋の夕ぐれ

寂蓮法師

前大僧正慈圓  
天台座主、慈鎮和尚と勅證せらる、嘉祿元年寂、年七十一。

攝政太政大臣大將に侍りし時、月歌五十首  
よませ侍りけるに  
有明の月の行方をながめてぞ野寺の鐘はきくべかりける

前大僧正慈圓

傳教大師  
俗名三津最澄、近江國の人、比叡山延曆寺の開祖、弘仁十三年寂、年五十六。

比叡山中堂建立の時

傳教大師

阿耨多羅三藐三菩提の佛たちわが立つ柚に冥加あらせたまへ

「新古今集」

二三 劍 難

中村吉藏

中村吉藏  
島根縣の人、文學者、明治十年生。  
仙英  
清涼寺の住職賢光。  
祖師  
達磨大師。

宇津木「お疲れの處へ、早速申し上げるも如何かと存じますが、江州清涼寺の仙英禪師殿が祖師の御年忌とやらで、急に思ひ立つて江戸へ上られましたので、ちよつとお目通りが願ひたいといふ事で、彼方に控へて居られますが、いかが取計らひませうか。井伊(嬉しげに)「なに仙英和尚が……それはそれは御珍客ぢや。何日までも當邸にお泊め申して御款待せい。早速お目にかからう。」

宇津木「は……實は明日、中仙道から御歸山のやうなお話でございました……では書院へお出でなされますか。井伊「明朝お歸り……それはあんまりお名残惜しいな……禪師と予とは師弟の交ぢや。書院への出開帳には及ぶまい。此



處が却つて心安くてよからう。お通し申せ。

宇津木「は。畏まりました。(退場)」

井伊「師の御坊に、居ながらお目にかゝれようとは思ひもよらなかつた。これも不思議な佛縁であらう……暗くなつた。秀之丞、燈明を點けい。」

清癩

(仙英和尚清癩鶴のやうな老禪師、六之丞に案内されて入り来る。)

井伊「恭しく一禮」「これはこれはよろこそ……思ひがけない事で、地獄で佛といふのはこの事でございませう。相變らず御すこやかで結構でございます。」

仙英「一揖、私もひよつこり江戸へでて來ましたのぢやが、つい貴方の顔が見たうなつて。」

(言ひ言ひちつと大老の顔を見すゑて、言葉を切る。)

井伊「どうか暫く當邸へ御逗留なされては。」

仙英「黙つて暫く見すゑてゐたが」「井伊公、貴方は日本の爲に、今大難に出逢つてゐられるな。」

井伊「は。いかにも、大難に出逢つてゐます。」

仙英「さうぢやらう、右へ向いても、左へ向いても、上を見ても、下を見ても、白刃の劍で八方塞がりぢや。劍の山のまん中につつ立つてゐられるのぢやな。」

井伊「は。如何にもおつしやる通りでございます。」

仙英「貴方の顔には劍難の相があり／＼と出てゐます。」

(井伊黙す。)

宇津木「えつ。あの劍難の御相が。」

(仙英黙つて頷く。)

井伊「は。實は、かげ腹を切つて、生きながらへてゐる氣で居りました。が、今の御一言で、私の行くべき途がはつきり見えました。」



絶後

有りがたう存じます。仙英「いや、さすがは井伊公……須らく千仞の嶮崖に手を撒して、絶後に再び蘇られい。」

井伊「これ生に非ず、死に非ず、唯一箇の無の字あるのみ……覺悟は定めて居ります。」

仙英「それで先づ安心しました……時に私に一人お供がある。身分違ひぢやから、大老様の御前へは出られぬ。御多忙の折から、正式でない、ほんのお茶一服立てて戴いて、このお室をそのまま、昔の埋木の舎の澗露軒にしたら仔細なからうと思ふが、どうでございませうな。」  
井伊「委細心得ました。お供は誰でございませう。ちよつと見當が付きかねますが、逢へばわかりますな。秀之丞、薄茶を立てい。お供は何卒此方へ。六之丞、御案内せい。」

筑然

宇津木「は……（六之丞と秀之丞は立つて行く。）

仙英「はあ、昔ながらに、楊柳の樹が御寵愛と見えて、この樹はいつも井伊公の影身に添うて植ゑられてゐますな。」

井伊「それも秋に逢うては、葉がちりちりして、あゝして骨ばかりになつて筑然と立つて居ります。だが、たとへ骨が舍利になつても、楊柳はやつぱり楊柳に相違ありませんでな。」  
仙英「御尤もでござる。」

（六之丞、粗末な衣裝の老人左官屋利八を連れて入り来る。）

宇津木「お連れ申しましてございます。」

利八「殿様……左官屋利八めでございます。」

井伊「膝を拍つて」は、誰かと思つたら昔の茶友達左官屋利八か。仙英「く來てくれた。仙英和尚殿と同道で江戸へ出たのか。仙英「一生に一度、江戸が見て死にたいといふ事で、一緒に來ました



ぢや。

利八「お蔭で江戸も見物しますし、大老様にもお目にかゝれまして、もう心置きなく成佛が出来ます、はい……大した御出世でござりますな。」

井伊「いや、お前と逢へば、昔ながらの部屋住の鐵之介に戻つたやうな氣持がするよ。どうぢや、近頃世間の景氣は、」

利八「あきまへんな。黒船が來よつて、愈貿易が開けると、何でも異人が金銀を皆さらつて行くのやといひましてな、米の値がどんどん上りますのや。皆、難儀しとりますさかい。」

六之丞「これ、御前でそのやうな事を……」

井伊「いや、構はぬ。ありのまゝを聽かせてくれるから善いのぢや……なる程な。あの近江の湖水の井堰を急に切つて落したら、川下の小魚は一時皆脾腹を返さうも知れぬ。開港が凡て

の國民に知慧と富とを貢いでくれるまでには、長の月日がからう。それまでは井堰の口を切つた者は皆に呪はれよう。  
仙英(領いて)「御意の通りぢや。」  
「井伊大老の死」

### 二四 鉢の木

前

シテ 佐野源左衛門常世  
ワキ 旅僧  
ツレ 源左衛門妻

後

シテ 佐野源左衛門常世  
ワキ 最明寺入道時頼  
ワキツレ 最明寺侍臣  
狂言 侍臣の從者  
地 前 上野國  
後 鎌倉

ワキ次第「行方さだめぬ道なれば、來し方もいづくならまし。詞「是は一處不住の沙門にて候。我このほどは信濃の國に候ひし



信濃なる……

「信濃なる淺間の嶽に立つ煙遠近人の見やはとがめぬ」伊勢物語

大井山

信濃國北佐久郡にあり

友の里

信濃國南佐久郡岸野村字伴野

離れ坂

信濃國北佐久郡、輕井澤と杓掛との間

碓氷川

碓氷峠より出で東流して高川に合し遂に利根川に入る

が、餘りに雪深くなり候ほどに、まづ此の度は鎌倉に上り、春になり修行に出てばやと思ひ候。

道行、信濃なる、淺間の嶽に立つ煙く、遠近人の袖寒く、吹くや嵐の大井山、捨つる身になき友の里、今ぞ浮世を離れ坂墨の衣の碓氷川、下す筏の板鼻や、佐野のわたりに着きにけり。

ワキ詞、急ぎ候ほどに。上野の國佐野のわたりに着きて候。あら

笑止や、又雪の降りきたりて候。此の所に宿を借らばやと思ひ候。

いかに此の屋の内へ案内申し候。ツレ、誰にてわたり候ぞ。ワキ、是は

修行者にて候。一夜の宿を御かし候へ。ツレ、安き御事にて候へど

も、主の御留守にて候ほどに、御宿は叶ひ候まじ。ワキ、さらば御歸り

まで是にて待ち申さうするにて候。ツレ、それはともかくもにて候。

わらはは外面へ出でむかひ、此の由を申さばやと思ひ候。シテ、あゝ

降つたる雪かな。いかに世にある人のおもしろう候らん。それ

板鼻

上野國碓氷郡板鼻町

佐野

上野國群馬郡佐野村

笑止

雪は

「雪似、鵝毛」飛散亂、人被、鶴

幣、立徘徊。」(白氏文集)

細布

陸奥國希婦の里の名産。

雪は鵝毛に似て飛んで散亂し、人は鶴幣を着て立つて徘徊すといへり。されば今降る雪も、もと見し雪にかはらねども、我は鶴幣を着て立つて徘徊すべき。

鈴木  
行方定ぬ道なれば、行方定ぬ道なれば、  
道なれば、来方なれば、  
ト、これの、一處不位の、  
われこの程の、  
餘りに雪、  
の度の鎌倉に上り、春より修行

カ、ル、袂も朽ちて袖せば  
き、細布衣陸奥の、けふの寒  
さをいかにせん。あら面  
白からずの雪の日やな。  
本 あら思ひよらずや。此の  
大雪に、何とて是にた、ず

みて御入り候ぞ。ツレ、さん候。修行者の御入り候が、一夜の御宿と仰せ候ほどに、御留守の由まうして候へば、御歸りまで御待ちあらうずるよし仰せ候ほどに、これまで参りて候。

シテ、さてその修行者はいづくにわたり候ぞ。ツレ、あれに御入り候。



山本の里  
上野國群馬郡  
八幡村大字根  
小屋の古名。

曲

戒行

値遇

ワキ「我等が事にて候。いまだ日は高く候へども、あまりの大雪にて前後を忘れて候ほどに、一夜の宿を御かし候へ。シテ、やすき御ことにて候へども、あまりに見苦しく候ほどに、御宿はかなひ候まじ。ワキ「いや、見苦しきは苦しからぬ事にて候。ひらに一夜を御かし候へ。シテ、とめ申したくは候へども、我等夫婦さへ住みかねたる體にて候ほどに、なか、御宿は思ひもよらぬことにて候。これより十八町あなたに、山本の里とてよき泊の候。日も暮れぬさきに、一足もはやく御出で候へ。ワキ「さては、しかと御かしあるまじにて候か。シテ、御痛はしくは存じ候へども、御宿はまゐらせがたう候。ワキ「あら曲もなや。よしなき人を待ち申して候ものかな。

ツレ「あさましや、我等かやうに衰ふるも前世の戒行つたなき故なり。せめてはかやうの人に値遇申してこそ、後の世の便りともなるべけれ。然るべくば、御宿を參らせ給ひ候へ。シテ、さやうに思し

駒とめて……  
藤原定家の  
歌、新古今集  
にあり。

めし候はば、何とて以前には承り候はぬぞ。いや此の大雪に遠くは御出で候まじ。某追つつき、とめ申し候べし。なう、旅人、御宿參らせうなう。餘りの大雪に、申す事もきこえぬげに候。痛はしの御有様やな。もと降る雪に道を忘れ、今ふる雪に行方を失ひ、一所にたゞずみて、袖なる雪を打拂ひ打拂ひし給ふ氣色、古歌の心に似たるぞや。駒とめて袖うちはらふかげもなし、佐野のわたり雪の夕暮。かやうによみしは大和路や、三輪が崎なる佐野のわたり。地、是は東路の、佐野のわたりの雪の暮に、迷ひつかれ給はんより、見苦しく候へども、一夜は泊り給へや。上歌、げに是も旅の宿旅の宿。かりそめながら値遇の縁。一樹の蔭のやどりも、此の世ならぬ契なり。それは雨の木蔭、是は雪の軒ふりて、憂き寝ながらの草枕、夢より霜や結ぶらん、夢より霜やむすぶらん。

シテ、いかに申し候。お宿は申して候へども、何にても候へ、參らせ



日本一

うずる物もなく候はいかに。ツレ折節これに粟の飯の候ほどに、苦しからずば、参らせられ候へ。シテさらば其のよし申し候べし。いかに申し候。御宿をば参らせて候へども、何にても参らせうずる物もなく候。折節これに粟の飯のあるよし申し候。苦しからずば、きこし召され候へ。ワキ、それこそ日本一の事にて候。賜はり候へ。シテ、なうきこし召されうずると仰せ候。急いで参らせ候へ。ツレ、心得申し候。

盧生

蜀の青年盧生、邯鄲の市にて道士呂翁の枕を借りて眠り、主人が黄梁を炊ぐ間に榮華五十年の夢を見たりといふ。

シテ、總じて此の粟と申す物は、古世にありし時は、歌によみ、詩に作りたるをこそ承りて候に、今は此の粟をもつて身命を繼ぎ候。げにや、盧生が見し榮華の夢は五十年、其の邯鄲の假枕、一炊の夢のさめしも粟飯かしく程ぞかし。あはれや、げに我もまたしばしなりとも、うちも寝て、夢にも昔を見るならば、慰む事もあるべきに、なり御覽ぜよ、かほどまで、地、住みうかれたる故郷の、松風寒き夜もす

がら、寝られねば夢も見ず、なに思ひ出のあるべき。

シテ、夜のふくるについて、次第に寒くなり候。何をがな火に焚いて、あて参らせ候べき。や、思ひいだしたる事の候。鉢の木を持ちちて候。これを切り、火に焚いてあて申し候べし。ワキ、げに、鉢の木の候よ。シテ、さん候。某世にありし時は、鉢の木に好き、數多木を集め持ちて候ひしを、かやうの體にまかりなり、いや、木ずきも無用と存じ、皆人に参らせて候。さりながら、今も梅櫻松を持ちて候。あの雪持ちたる木にて候。某が祕藏にて候へども、今夜のおもてなしに、これを火に焚きて、あて申さうずるにて候。ワキ、いや、これは思ひもよらぬ事にて候。御志はありがたう候へども、自然またお事世に出で給はん時の御慰みにて候間、なか、思ひもよらず候。シテ、いや、とても此の身は埋木の花咲く世にあはん事、今此の身にてはあひがたし。ツレ、たゞいたづらなる鉢の木を、御身

お事

埋木の……  
「埋木の花咲くこともなかりしに身のなるはてぞあはれなりける」  
（平家物語、源三位頼政）



窓の梅云々  
「池凍、東頭風  
 度解、窓梅北  
 面雪封寒、」  
 (和漢朗詠集、  
 菅原篤茂)  
 見じといふ  
 「山里の折り  
 かけ垣の梅の  
 花いかなる人  
 の見じといふ  
 らん」(菅家後  
 集)

の爲に焚くならば、シテ是ぞ誠に難行の、法の薪とおぼしめせ。  
ツレしかもこのほど雪ふりて、シテ仙人に仕へし雪山の薪、ツレか  
くこそあらめ。シテ我も身を、地捨人の爲の鉢の木。切るとても  
よしや惜しからじと、雪うち拂ひて見れば、おもしろやいかにせん。  
まづ冬木より咲きそむる、窓の梅の北面は、雪封じて寒きにも、こと  
木よりまづ先だてば、梅を切りや初むべき。見じといふ人こそう  
けれ、山里の折りかけ垣の梅をだに、情なしと惜しみしに、今更薪に  
なすべしと、かねて思ひきや。櫻を見れば春ごとに、花すこしおそ  
ければ、此の木やわぶると、心をつくし育てしに、今は我のみわびて  
住む、家櫻切りくべて、緋櫻になすぞ悲しき。シテさて松はさしもげ  
に、地枝をため、葉をすかして、かゝりあれと植ゑおきし、其のかひ  
今は嵐吹く、松はもとより煙にて、薪となるもことわりや、切りくべ  
て今ぞ御垣守、衛士の焚く火はおためなり。よくよりてあたり給

御垣守

「御垣守衛士  
 の焚く火の夜  
 はもえて晝は  
 消えつつ物を  
 こそ思へ」(詞  
 花集、大中臣  
 能宣)

へや。

ワキ、近頃よき火にあたり、寒さを忘れて候。シテ御出でにより、我等  
も火にあたりて候。ワキ、いかにまうし候。主の御苗字をば何とま  
うし候ぞ、承りたく候。シテいや、某は苗字もなき者にて候。ワキ、何と  
仰せ候とも、たゞびとは見え給はず候。自然の時の爲にて候。  
なにの苦しう候べき。御苗字を承り候べし。シテ此の上は何をか  
つゝみ候べき。是こそ佐野の源左衛門尉常世がなれる果にて候。  
ワキ、それは何とてかやうの散々の體にはなり給ひて候ぞ。シテ其  
の事にて候。一族どもに押領せられて、かやうの身となりて候。

押領

最明寺殿  
 北條時頼。

ワキ、なう、それは何とて鎌倉へ御上り候ひて、其の御沙汰は候はぬ  
ぞ。シテ運の盡くる所は、最明寺殿さへ修行に御出で候上は候。か  
やうにおちぶれては候へども、御覽候へ、これに物の具一領、長刀一  
えだ、またあれに馬をも一匹つないで持ちて候。これは只今にて



なんほう

たゝ頼め

「なほ頼めし  
めちが原のさ  
しも草われ世  
の中にあらん  
限りは(新古  
今集、清水觀  
音の御歌)

もあれ、鎌倉に御大事あらば、ちぎれたりとも、此の具足取つて投げ  
かけ、錆びたりとも、薙刀を持ち、瘦せたりとも、あの馬に乗り、一番に  
馳せ参じ、着到につき、さて合戦始らば、地敵大勢ありととも、  
一番に割つて入り、思ふ敵と寄りあひ打ちあひて、死なん、此の身の、  
此のまゝならばいたづらに、飢ゑにつかれて死なん、命、なんほう無  
念の事さうぞ。ワキよしや身のかくては果てじ、たゝ頼め、我、世の中  
にあらんほど。又こそ参り候はめ。いとま申していづるなり。  
シテなごり惜しの御ことや。初はつゝ、む我が宿の、さも見苦しく候  
へど、しばしはとまり給へや。ワキとまるなごりのまゝならば、さて  
いくたびか雪の日の、シテ空さへ寒き此の暮に、ワキいづくに宿を  
狩衣、ツレテ今日ばかりとまり給へや。ワキなごりは宿にとまれども、  
いとま申して、ツレテ御出でか。地さらばよ常世。ツレテまた御入り。  
地自然鎌倉に御上りあらば、御尋ねあれ。けうがる法師なり。か

公方

ひがひしくはなけれども、公方の縁になり申さん。御沙汰捨てさ  
せ給ふなど、いひすていて船の、共になごりや惜しむらん。

中入

シテいかにあれなる旅人、鎌倉へ勢の上るといふはまことか。な  
におびたゞしく上る、さぞあるらん。東八箇國の大名、小名、思ひ思  
ひの鎌倉入り、さぞ見事にて候らん。白金物打つたる糸毛の具足  
に、金銀をのべたる太刀かたな、飼ひに飼うたる馬に乗り、乗替中間  
さらびやかに、うちつれく上る中に、常世が常にかはりたる馬、物  
の具や、打物の、物、其のものにあらざる氣色、さぞ笑ふらん。さりな  
がら、所存は誰にも劣るまじと、心ばかりは勇めども、勇みかねたる  
瘦せ馬の、あら道おそや。地急げどもく、弱きに弱き柳の糸の、  
シテよれによれたる瘦せ馬なれば、地打てども、あふれども、先へ  
は進まぬ足弱車の、乗り力なければ追ひかけたり。



ワキ、いかに誰かある。ツレ、御前に候。ワキ、國々の軍勢どもは皆々來りてあるか。ツレ、さん候、悉く参りて候。ワキ、其の諸軍勢の中に、いか

にもちぎれたる具足を着、さびたる長刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者一騎あるべし。急いでこなたへ來れと申し候へ。



常世小堀頼音筆

いかに申し候。シテ、何事にて候ぞ。狂言、急いで御前へ御参り候へ。

ツレ、畏まつて候。いかに誰かある。狂言、御前に候。ツレ、君よりの御説には、諸軍勢の中にちぎれたる具足を着、さびたる薙刀を持ち、瘦せたる馬を自身ひかへたる武者あるべし。急いで尋ねて、御前へ参れとの御ことにて候。狂言、畏まつて候。

シテ、何と、某に御前へ参れと候や。狂言、なか／＼の事。シテ、あら思ひよらずや。定めて人たがひにて候べし。狂言、いや／＼そなたの事にて候。其の仔細は、諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者をつれて参れとの御事にて候が、見申せば、そなたほど見苦しき武者も候はぬ程に、さて申し候。急いで御参り候へ。シテ、何と、たとへば諸軍勢の中に、いかにも見苦しき武者に参れと候や。狂言、なか／＼の事。シテ、さては某が事にて候べし。畏まつたると御申し候へ。狂言、心得申し候。

シテ、げに／＼是も心得たり。某が敵人、謀叛人と申し上げ、御前に召出され頭を刎ねられたためな。よし／＼それも力なし。いでいて御前に参らんと、大床さして見渡せば、地、今度の早打に／＼。上りあつまる兵、きら星の如く並み居たり。さて御前には諸侍、其の外數人並みゐつ、目を引き指をさし、笑ひあへる其の中に、シテ



神妙

「横縫のちぎれたる、地古腹卷に錆長刀。やうく横たへ、わる  
 びれたる氣色もなく、参りて御前にかしこまる。  
ワキやあいかに、あれなるは佐野の源左衛門尉常世か。是こそい  
 つぞやの大雪に、宿かりし修行者よ。見忘れてあるか。いで汝佐  
 野にて申しよな。今にてもあれ、鎌倉に御大事あるならば、ちぎ  
 れたりとも、其の具足取つて投げかけ、錆びたりとも、其の長刀を持  
 ち、瘦せたりとも、あの馬に乗り、一番に馳せ参すべきよし申しつる  
 言葉の末を違へずして、参りたるこそ神妙なれ。まづく今度の  
 勢づかひ、全く餘の儀にあらず。常世が言葉の末、誠か偽か、知らん  
 爲なり。又當參の人々も、訴訟あらば申すべし。理非によつて、其  
 の沙汰いたすべきところなり。まづく沙汰の始には、常世が本  
 領佐野の莊、三十餘郷かへし與ふる所なり。又何よりも切なりし  
 は、大雪ふつて寒かりしに、祕藏せし鉢の木を切り、火に焚きあてし

安堵

佐野の舟橋  
 「かみつけぬ  
 佐野の舟橋取  
 りはなし親は  
 さくれどわは  
 さかるがへ」  
 (萬葉集、東歌)

志をば、いつの世にか忘るべき。いで其の時の鉢の木は、梅櫻松に  
 てありしよな。其の返報に、加賀に梅田、越中に櫻井、上野に松枝、あ  
 はせて三箇の莊、子々孫々に至るまで、相違あらざる自筆の狀、安堵  
 に取添へ、たびければ、シテ常世はこれを賜はりて、地常世は之を  
 賜はりて、三度頂戴仕り、これ見給へや人々よ。初め笑ひしともが  
 らも、是ほどの御氣色さぞ羨ましかるらん。

地さて國々の諸軍勢、皆御いとま賜はり、故郷へとてぞ歸りける。  
シテ其の中に常世は、地其の中に常世は、よろこびの眉を開きつ  
 つ、今こそ勇め此の馬に、うちのりて上野や、佐野の舟橋とりはなれ  
 し、本領に安堵して、歸るぞうれしかりけるく。  
 「觀世流謠曲」

二五 言葉と聯想

佐々 醒雪

和歌に屢用ゐられた詞は、名所と同じやうに、定まつた聯想が附



佐々醒雪  
名は政一、京都市の人、國文學者、文學博士、東京高等師範學校教授、大正六年歿、年四十六。

範疇

着してゐるものが多い。例へば、落花は惜しいもの、秋風は悲しいものといふやうに、相場がきまつてゐて、落花の面白さ、秋風の快さなどは、歌として異様に感ぜられたことが久しかつた。これも畢竟はたゞ散る花といひ、秋の風といへば、何等の説明を與へずとも、古歌に通じた人は、すべて一定の聯想を惹くことになつてゐるところから、これに反した思想は、餘程綿密に説明する必要があつて、三十一文字に入りにくいといふのが、かくの如く聯想の固定して來た一原因で、ことに歌道が成立つてからは、歌を詠む人は、すべて古歌によつて詩想を涵養するので、直覺的に得來たるといふことは稀であつたのだから、散る花に對しておもしろいと感じ、秋風に快く感じたのは、殆ど俗念として退け去つたのであらう。近來の和歌がこの範疇を脱却したのは、甚だ慶すべきことではあるが、その爲に、やゝもすると餘情の判明ならぬものも出來た。例へば、秋

秋風ぞ吹く  
能因法師の歌  
「都をば霞と  
ともに立ちし  
かど秋風ぞふ  
く白河の關」  
ロケーション  
Location.

風ぞふく白河の關といふのは、都が遠くて寂しい趣を詠じたので、決して殘炎が去つて快く涼しいといふのではない。若し涼しいつもりならば、秋風涼しといはないでは、古歌に通じた人にはわからない歌になるのである。尠くも餘情のロケーションが判明を缺くのである。だから古歌に於て既に定まつた聯想のある語を用ゐて、これと異つた聯想を要求するには、必ず多少の説明がなくてはならぬ。

發句の季題として屢用られた語は、大抵聯想が定まつてゐる。梅といへば清瘦なるもの、紅梅は艶なもの、春の風は長閑に、秋の風は寂しく、ことに秋の雨といひ、秋の暮といひ、時雨といへば寂しきものの限りであつて、この聯想は俳諧では動かすべからざるものとなつてゐる。秋とはいつても、昨日今日の殘炎にすさまじい夕立めいた雨もある。雪消の山を吹きおろす春風は、長閑どころの



話ではない。だがさういふ異例を數へては、十七字の中に詩趣が吟ぜられる餘地がない。そこで止むを得ず、或は必然に、秋風春風の特色のみがこれらの詞の聯想となつたもので、發句の題として用ゐる名詞には、この種の聯想の多少固定してゐないものは稀なのである。

なかにも、長き日は春で、短夜を夏と限つたのをかしく、長き夜は秋であつて、冬の夜には長短の形容詞を用ゐないのも奇といへば奇だ。しかしこれらは和歌でも多くはこの例であるが、肌寒朝寒、夜寒が秋であるなどは、俳人の發明である。かく時候が定まれば従つて聯想も定まるのであつて、秋の寂しく長い夜といふことを唯「夜長」の一語であらはしてゐて、秋口の肌寒き頃を「肌寒や」てすましてゐるなどは、至極簡便ではないか。かつは春の月といへば、朧々たるものに限られ、秋の月は清いと定まつてゐて、ことにたゞ

默契

月とのみいへば、秋の清い月のことであるなどは、門外漢の不思議に思ふところであらう。これほどに言語の聯想のみならず、意味の上にすら、特別の默契をもつてゐるが爲に、十七字の俳句にも、時とすると、容易に企及すべからざる程に複雑な餘意餘情があらはれるのである。俳道の門外漢が、往々俳句を難解な謎のやうに思ふのも、この默契に通じない爲である。

「近代文藝雜誌」

二六 冬 木 立

炭 太 祇

年玉や利かぬ藥の醫三代

春風や薙刀もちの目八分

川下に綱うつ音やおぼろ月

やぶ入の寝るやひとり親の側

春深し伊勢を戻りし一在所

炭 太 祇  
江戸の人、俳  
人、京都に住  
む、明和八年  
歿、年六十三。



寺からも婆を出されし田植かな  
 鉾處々に夕風そよぐ囃子かな  
 城内に踏まぬ庭あり轡むし  
 馴れて出る鼠のつらや小夜砧  
 盜人に鐘つく寺や冬木立  
 河豚食ひし人の寢言のねぶつ哉

〔俳文俳句抄〕

二七 諺

藤井紫影

格言は賢哲の垂訓にして、俚諺は凡俗の信條なり。前者は明らかにその立言者を求め得べく、後者は輿衆の聲にして、その作者を知るべからず。隨うて、その發生の時期を精確に定めんこと頗る難しと雖も、多數の俚諺中には、間々その發生の時期、前後新古の關係、變遷等を推測するを得べきものなきにしもあらず。

藤井紫影  
 名は乙男、兵庫縣の人、國文學者、文學博士、京都帝國大學名譽教授、明治元年興業

吾人が座談演說等に日常使用する多數の諺は、吾人の祖先より知識的・道德的遺産の一部分として繼承せるものにて、吾人が新に製作したるものにあらず。有史以來、世々の人類が、内外諸種の天然・人事に遭遇し、物に觸れ事に感じ、或は觀察し、或は考慮し、或は感激し、喜怒哀樂種々雜多の經驗を積み、人生に普通なる知識を得して、後世子孫に遺せる者、これ即ち今日行はるゝ諺の多數なり。「手輕にして受用し易きが爲に、滅亡の非運を免れし古知識の斷片なり。」とは、二千年の昔、俚諺研究の率先者アリストートル既に之をいへり。トレンチはその俗諺論に於て、今日文明諸國の共有財産とも稱すべき諺は、各國民が祖先傳來の遺産にして、或は口々に語り継ぎ、或は前代の記者によりて後世に書傳へられて、希臘・拉典の古きより、中世の諺に至るまで、依然として今日に存し、諸國に行はる。されば、近き世に起りたる諺ならんと一般に信ぜらるゝもの

アリストートル  
 Aristoteles  
 ギリシャの哲學者、(西紀前三四三三)  
 トレンチ  
 Richard  
 Chevenix  
 Trench  
 アイランドの宗教家、言語學者、詩に巧なり、(西曆一八七一—一八八六)



載籍

にして、その淵源の極めて悠久なるを發見する事少なからず。といへり。現今行はるゝ我が國の諺にも、其の發生時代の頗る遠き物あり。「痛む上に鹽塗る。」「重荷に小づけ。」の如きは、既に萬葉集に見え、「一升枺に二升は入らぬ。」といふは枕草紙に出で、死ぬる子みめよし。「飯粒で鯛釣る。」といふは、共に早く土佐日記に見えたり。此等が孰れも千年内外の歴史を有するものならんとは、この諺を口にする人々のなべて豫想せざる所なるべく、今日にては既に之を徴すべき物なしと雖も、その淵源の遠き事、前數者に相譲らざる物尙多かるべし。降りて鎌倉時代より室町時代に及べば、現代のものと同一なる諺の數、次第に多くなりゆくは、固よりいふ迄もなき事にて、鎌倉室町時代の載籍を通讀せし者の容易に認め得る所なり。祖先傳來の他に、外國より輸入せられたる諺あり。時としては、彼我相交換して、雙方同時に行はるゝより、孰れが借主にして、孰れ

合せもの……  
「盛必有衰、會有二別離。」  
 (涅槃經)  
 仰向き……  
「惡人善賢者、猶仰天而唾。」  
 (四十二章經)  
 蛙の面に……  
「蛙面水。」  
 (禪林句集)  
 鹿の角を……  
「鹿角蜂。」  
 (禪林句集)  
 渴すれども……  
「渴不飲盜泉之水、熱不息惡木之陰。」  
 (陸機賦)  
「麒麟之衰也、驚馬先之。」  
 (戰國策)

が貸主なるか、容易に判別し難きもの亦少なからず。四面海を環らし海東に屹峙せる我が國は、歐洲諸國の如く他國との交通自由ならず、人種言語の關係も亦彼の如くならざるより、他國と諺を貸借交換して、その本主の誰なるかを判ずるに苦しむが如き患少しと雖も、支那朝鮮との交通夙に開け、儒佛の教深く民俗に染みしより、内外典より來たれる諺甚だ多く、一見して外國將來たるを認むべき者の他に、衣服外觀は純然たる國風ながら、なほその正體は儒佛にあらざやと疑はるゝもの往々これあり。殊に僧徒は布教の必要上、經文中の金言を俗譯して、眼に一丁字なき善男善女を教化するより、その傳播極めて早く、廣く諺として世上に流布するに至る。「合せものは離れもの。」「仰向き唾はく。」「蛙の面に水。」「鹿の角を蜂が螫す。」の如き、巧に日本化せられたり。「渴すれども盜泉の水は飲まず。」「麒麟も老いては驚馬に劣る。」の類は、何人も一見し



麻につるゝ蓬「蓬生三麻中、不扶而直。」(荀子)  
 井の中の蛙「井蛙不可語於海、者拘於虛也。」(莊子)  
 情に刃向ふ「仁者無敵。」(孟子)  
 時は金「Time is money。」  
 習慣は「Custom is a second nature。」  
 一兎を「He who pursues two hares, catches neither。」

て國産に非ざるを知るべきも、麻麻\*につるゝ蓬蓬\*。「井の中の蛙」情情\*に刃向ふ刃なし。の如き、極めて通俗にして平易なるものが、佶屈なる儒教の語に胚胎せしものとは誰か思ふべき。「壁に耳」といふも古き諺なれど、既に詩經に「君子無易由言、耳屬於垣」の語あり。拉典にも同一の諺ありて、それより汎く今日の歐洲諸國に分布せり。維新後、西洋諸國との交通盛にして、外國語を學ぶ者多きに隨ひ、外國の諺の輸入せられしもの、またこれあり。「時は金」習慣は第二の天性。「二兎を追ふ者は一兎をも獲ず」などの類即ち是なり。なほ、又人の社會に立つや、生活上絶えず新經驗に遭遇し、智識上に道德上に、新なる自家の確信を生ずるや、その經驗的所見を發表するに一種の文句を以てす。而して、その文句にして幸に諺たり得べき資格を具備する時は、一般國民の贊同を博し、遂に諺として成立すべき權利を享有するに至る。

山川の……  
 空也上人繪詞  
 傳に見ゆ。

一國の俚諺は生々蕃殖して窮期なきと共に、一方舊く行はれて、既に國民の記憶を去りたるものはた少なからず。此の如く、舊を忘れ新を迎へて、俚諺は時代と共に増減變遷するものなり。古來の典籍殊に、その通俗的なるものは、幾多の諺をその中に採録含蓄するのみならず、書中の佳句妙章は往々世人に裁斷割取せられて、恰も本來の諺なるかの如く使用せられ、時としては漸次その語句を變更して、諺としての使用に便利ならしむる餘り、一見その出所を辨知し難きまで、相貌を變ずるに至る事あり。和歌俳諧俗歌の類は、その形體短小にして、引用にも記憶にも便利なるを以て、諺の如く使用せらるゝ物多し。和歌より來たれるものは、例へば、

\*山川の末に流るゝ椽がらもみをすててこそうかむ  
 瀬もあれ



思ふこと……  
後水尾院の御  
製と言ひつた  
へらる。

救濟

室町時代の  
人、連歌に長  
じ、二條良基  
の師たり、歿  
年未詳。

冠里

本名安藤信  
友、美濃加納  
城主、享保十  
七年歿、年六  
十二。

千代

姓は福田、加  
賀國の人、安  
永四年歿、年  
七十四。

蓼太

姓は大島、信  
濃國の人、天  
明七年歿、年  
七十三。

\*思ふこと一つ叶へば又二つ三つ四ついつもむつか  
しの世や

の如き俳諧の附句及び俳句川柳より來たれるものは例へば、  
草の名も所によりて變るなり浪花の蘆は伊勢の濱

荻 救濟

物いへば唇寒し秋の風 芭蕉

雪の日やあれも人の子樽拾ひ 冠里

百なりや蔓一すぢの心より 千代

化物の正體見たり枯尾花 也 有

世の中は三日見ぬ間の櫻かな 蓼太

孝行をしたい時には親がなし 川柳

大男總身に智慧がまはりかね 同

の如きものは是なり。

訓誡の意を含み、又は道義上の譬喩に供すべき詩歌俳句が、諺と  
して用ゐらるゝのみならず、偉人名士の語は直ちに當時の人口に  
膾炙し、永く後世に傳誦せられて、俗諺と伍を同じうするに至る。

孔孟釋迦などの金言の如きは、いふも更なり。王彦章が、豹死留

皮、人死留名」といひ、歷山大王が波斯の大軍來たり襲はんとするを

聞き、自若として、「屠兒、千羊を恐れず」といひ、家康が五字七字の戒

「うへをみな。みのほどをしれ」の如き、一度、此等偉人傑士の口頭を

出づれば、忽ち千萬人の間に傳誦通用せられ、永く世の諺となりて

滅びず。定家が「和歌に師匠なし」と教へ、芭蕉が之に倣ひて、「俳諧に

古人なし」と唱へたるが如き、前數者に比して適用の範圍稍狭しと

雖も、名人の一語世上の諺となるに至つては、其の揆一のみ。

諺は通俗を旨とすれども、必ずしも凡人庸流の口にのみ出づと

斷ずべからず。寧ろ世故に長け、機智に富み、才識時俗を抜くこと

王彦章  
支那、梁代の  
人。

揆



一頭地を抜く  
諷刺

一頭地たる者にして、始めて痛切警拔なる人生の批評諷刺を擅にし得べきを記憶せざるべからず。「武士は食はねど高楊枝。」花は櫻木人は武士。」と高く標置し、馬方船頭お乳の人。「商人の空誓文。」と罵倒したるが如き、其の立言者の地位如何を察するに難からず。詩歌格言等より來たれる諺は、その發生の緣由一目瞭然たれども、此の如きは無數の俚諺中極めて小部分にして、その大多數は何時如何にして生ぜしか、生誕の時日も出自の父母も漠として知るべからざること、恰も車馬喧鬧の十字街頭に置去りにせられたる棄兒の如し。幸にして、この兒愛敬ありて人なつこく、機轉利きたるより、衆人の愛顧を得、饑えず凍えず、無事に成長して、世間に重寶がらるれども、人も我もその來歴如何を知る能はざるは、依然として少しもありし昔に異ならざるなり。されば、諺の起源として世に傳へらるゝ話柄は、信據すべきもの極めて少なく、諺の起源とい

出自

はんよりは、寧ろ諺の爲に後日想像附會せしにあらざやと疑はるるもの十の七八なり。さるを、強ひて之が起源を求めんとするは、猶棄子の系圖を作るが如く、所謂骨折損の草臥儲たる事多かるべし。

「俗諺論」

### 二八 落花の雪

先年  
正中元年。  
白狀  
七月  
元弘元年。

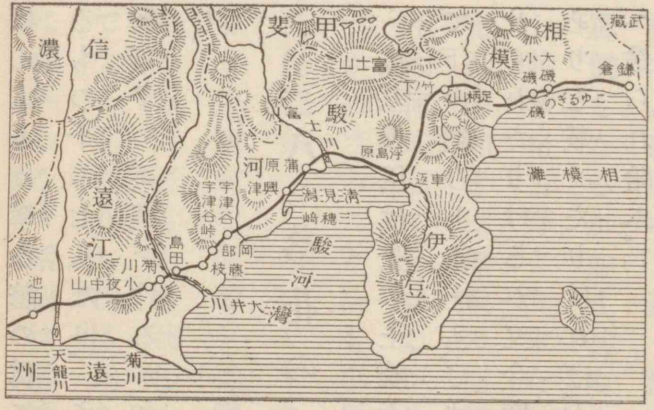
俊基朝臣は、先年土岐十郎頼貞が討たれし後、召捕られて鎌倉まで下り給ひしかども、さまざまに陳じ申されし趣げにもとて赦免せられたりけるが、又今度の白狀どもに、専ら隱謀の企彼の朝臣にありと載せたりければ、七月十一日に又六波羅へ召捕られて、關東へ送られ給ふ。

再犯赦さざるは法令の定むる所なれば、何と陳ずとも許されじ。路次にて失はるゝか、鎌倉にて斬らるゝか、二つの間をば離れじと



落花の雪

「またや見ん  
交野のみの、  
櫻が花の雪  
散る春の曙」  
（新古今集、藤原俊成）  
紅葉の錦  
「朝まだき嵐  
の山の寒けれ  
ば紅葉の錦き  
ぬ人ぞなき」  
（拾遺集、藤原公任）



思ひまうけてぞ出でられける。

落花の雪に踏迷ふ、交野の春の櫻がり、紅葉の錦をきて歸る、嵐の山の秋の暮、一夜を明すほどだにも、旅寝となればものうきに、恩愛のちぎり浅からぬ、我が故郷の妻子をば、行くへも知らず思ひ置き、年久しくも住みなれし、九重の帝都をば、今を限りと願みて、思はぬ旅に出で給ふ、心のうちぞあはれなる。

憂きをばとめぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身をうき舟の浮き沈み、駒もとゞろと踏みならず、勢多の長橋打渡り、行きかふ人に近

うねの野に

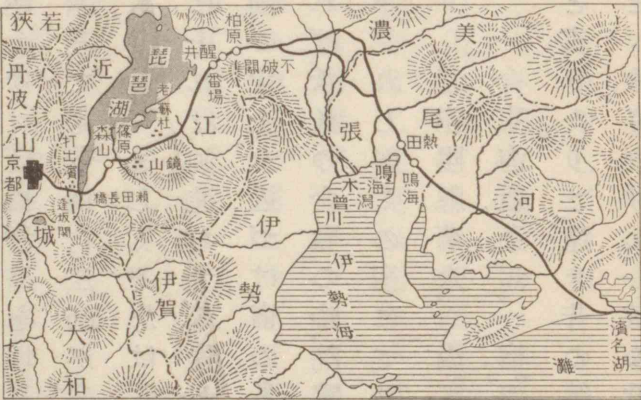
「近江より朝  
たちくればう  
ねの野にたづ  
ぞ鳴くなる明  
けぬこの夜  
は」古今集、  
大歌所御歌  
時雨も  
「白露も時雨  
もいたく守山  
は下葉のこら  
ず色づきにけ  
り」古今集、  
紀貫之

鏡の山

「鏡山いざ立  
ちよりに見て  
行かん年へぬ  
る身は老いや  
しぬると」古  
今集、大伴黒  
主

不破の關屋

「一人住まぬ不  
破の關屋の板  
びさし荒れに  
しあとはたい  
秋の風」新古  
今集、藤原良  
經



江路や、世をうねの野に鳴くたづも、子を思ふかとははれなり、時雨もいたくもる山の、木の下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分くる道を過ぎゆけば、鏡の山はありとて、涙に曇りて見えわかず、物を思へば夜の間に、老蘇の森の下草に、駒をとゞめてかへりみる、故郷を雲や隔つらん。番馬醒井柏原、不破の關屋は荒れはてて、なほもるものは秋の雨の、いつか我が身の尾張なる、熱田の八劔伏し拜み、潮干に今や鳴海瀉、傾く月に道見えて、

明けぬ暮れぬと行く道の、末はいづくと遠江、濱名の橋の夕汐に、ひく人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰かあはれと夕暮



鳴海瀧

「さよ千鳥聲  
こそ近く鳴海  
湯傾く月に潮  
やみつらん」  
〔新古今集、藤  
原季能〕

池田の宿

遠江國磐田  
郡、天龍川の  
西岸。

命なりけり

「年たけてま  
た越ゆべしと  
思ひきや命な  
りけり小夜の  
中山〔山家集〕

南陽縣

〔南陽縣縣有  
甘谷、谷中水  
甘美、上有大  
菊、落水從  
レ山流下、谷中  
人家飲此水、  
上壽百二三

の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き給ふ。旅館の燈かすかにして、鶏鳴曉を催せば、匹馬風に嘶えて、天龍川を打渡り、小夜の中山越えゆけば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の天を望みても、昔西行法師が命なりけり」と詠じつゝ、再び越えし跡までも、うらやましくぞ思はれける。隙行く駒の足はやみ、日已に亭午に上れば、餉進らす程とて、輿を庭前に舁き止む。轅を叩いて警固の武士を近づけ、宿の名を問ひ給ふに、菊川と申すなり」と答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし咎によつて、光親卿關東へ召下されしが、この宿にて誅せられし時、

昔南陽縣菊水。汲下流而延齡。

今東海道菊川。宿西岸而終命。

と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我が身の上になり、あはれやいとゞまさりけん、一首の歌を詠じて、宿の柱にぞ書かれける。

十、其中百餘  
歳、七八十者  
則爲レ天。  
〔風俗通〕

夢にも人に

「駿河なるう  
つの山邊のう  
つつにも夢に  
も人にあはぬ  
なりけり」  
〔伊勢物語〕

上なき思ひ

「富士の嶺の  
煙はなほぞ立  
ちのぼる上な  
きものはおも  
ひなりけり」  
〔新古今集、藤  
原家隆〕

いにしへもかゝるためしを菊川のおなじ流れに身をやしづめん  
大井川を過ぎ給へば、都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花ざかり、龍頭鷁首の船に乗り、詩歌管絃の宴に侍りしことも、今は二度見ぬ夜の夢となりぬと思ひつゞけ給ふ。  
島田藤枝にかゝりて、岡邊の眞葛うら枯れて、物悲しき夕暮に、宇都の山邊を越えゆけば、葛楓いと繁りて道もなし。昔業平の中將の住處を求むとて、東の方に下りしに、夢にも人に逢はぬなりけり」と詠みたりしも、かくやと思ひ知られたり。清見瀉を過ぎ給へば、都に歸る夢をさへ、通さぬ波の關守に、いとゞ涙を催され、むかひはいづこ三穂が崎、興津蒲原打過ぎて、富士の高嶺を見給へば、雪の中より立つ煙、上なき思ひに比べつゝ、明るる霞に松見えて、浮島が原を過ぎゆけば、潮干や浅き船浮きて、おりたつ田子のみづからも、浮



世をめぐる車返し、竹の下道行きなやむ、足柄山の峠より、大磯小磯見下して、袖にも波はこゆるぎの、急ぐとしもはなけれども、日數つもれば七月二十六日の暮程に、鎌倉にこそ着き給ひけれ。

「太平記」

### 二九 方丈記

鴨 長明

鴨 長明

山城國賀茂社の氏人、後鳥羽上皇に仕へ和歌所の寄人たり、建保四年歿、年六十三。

うたかた

一 ゆく川の流れ  
ゆく川の流れば絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとゞまることなし。世の中にある人と住家と、またかくの如し。玉しきの都の中に、棟を竝べ、豊をあらそへる高き卑しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれど、是をまことかと尋ねれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年造り、あるは大家ほろびて小家となる。住

む人もこれに同じ。處もかはらず、人も多かれど、古へ見し人は二十三人が中に、僅かに一人二人なり。朝に死し夕べに生るゝならひ、唯水の泡にぞ似たりける。知らず、生れ死ぬる人、何方より來たりて何方へか去る。また知らず、假のやどり、誰が爲に心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。その主人と住家と無常を争ひ去るさま、いはば朝顔の露に異ならず。あるは露落ちて花残れり。残るといへども、朝日に枯れぬ。あるは花は萎みて、露なほ消えず。消えずといへども、夕べを待つことなし。

### 二 地 震

\*元暦二年の頃、大なるふること侍りき。そのさま世の常ならず。山崩れて川を埋み、海かたぶきて陸をひたせり。土裂けて水湧きあがり、巖割れて谷にまろび入り、渚こぐ船は浪にたゞよひ、道ゆく駒は足のたちどをまどはせり。まして都のほとりには、在々所々、

元暦 後鳥羽天皇の御代の年號なる

たちど



あどなし



鴨 長 明

堂舎塔廟一として全からず。あるは崩れ、あるは倒れたる間、塵灰立ちのぼりて盛なる煙の如し。地の震ひ家の破るゝ音、いかづちに異ならず。家の中に居れば、忽ちうちひしげなんとす。走り出づれば、また地割れ裂く。羽なければ、空へもあがるべからず。龍ならねば、雲にのぼらんこと難し。おそれの中に恐るべかりけるは、唯地震なりけりとぞ覺え侍りし。その中に、ある武士のひとり子の、六つ七つばかりに侍りしが、築地のおほひの下に小家をつくり、はかなげなるあどなし事をして遊び侍りしが、俄かに崩れ埋められて、あとかたなく平にうちひさがれて、二つの目など一寸ばかりうち出されたるを、父母かゝへて、聲も惜しまず悲しみあひて

侍りしこそ、あはれに悲しく見侍りしか。子のかなしみには、猛き者も恥を忘れけりと覺えて、いとほしくことわりかなとぞ見侍りし。

かくおびたゞしくふることは、しばしにて止みにしが、その餘波しばし絶えず。世の常に驚くほどのなる、二三十度ふらぬ日はなし。十日二十日過ぎにしかば、やう／＼間遠になりて、あるは四五度、二三次、もしは一日まぜ、二三日に一度など、大方その餘波三月ばかりや侍りけん。四大種の中に、水火風は常に害をなせど、大地に至りては殊なる變をなさず。昔、齊衡の頃かとよ、大なるふりて東大寺の佛のみぐし落ちなどして、いみじき事ども侍りけれど、猶この度にはしかずとぞ。即ち人皆あぢきなきことを述べて、聊か心の濁りもうすらぐかと思しほどに、月日かさなり年越えし後は、言の葉にかけていひ出づる人だになし。

齊衡  
文徳天皇の御  
代の年號。



三 住みうき世

すべて世のありにくきこと、我が身と住みかとの、はかなくあだなるさまかくのごとし。いはんや所により、身の程に従ひて、心をなやますことは擧げて數ふべからず。もしおのづから數ならずして權門の傍らに居るものは、ふかく悦ぶことはあれど、大いに樂しぶに能はず。歎きある時も聲をあげて泣く事なし。進退やすからず、立居につけて恐れをの、くさま、譬へば雀の鷹の巢に近づけるが如し。もし貧しくして、富める家の隣に居るものは、朝夕すほき姿を恥ぢて、詔ひつゝ出て入る。妻子僮僕の羨める様を見るにも、富める家の人のないがしろなるけしきを聞くにも、心念々に動きて、時として安からず。もし狭き地に居れば、近く炎上する時、その害をのがるゝ事なし。もし邊地にあれば、往反わづらひ多く、盜賊の難はなれがたし。勢あるものは貪慾ふかく、獨身なるもの

すほき姿

は人に輕しめらる。實あれば恐れ多く、貧しければ歎き切なり。人を頼めば、身他の奴となり、人をはごくめば、心恩愛に使はる。世に従へば身苦し、また従はねば狂へるに似たり。いづれの所を占め、いかなるわざをしてか、しばしもこの身をやどし、たまゆらも心を慰むべき。

四 日野山の庵

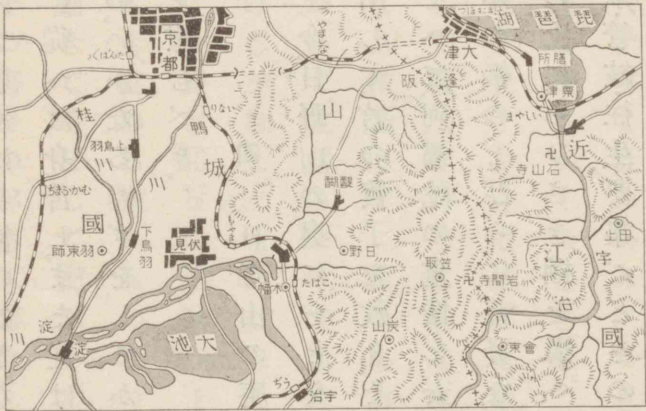
今、日野山の奥にあとをかくして後、南にかりの日がくしをさし出して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、うちには西の垣にそへて、阿彌陀の畫像を安置し奉り、落日を受けて眉間の光とす。かの帳のとびらに普賢ならびに不動の像をかけた。北の障子の上にちひさき棚を構へて、黒き革籠三四合を置く。すなはち和歌・管絃・往生要集ごとき抄物を入れたり。傍らに箏琵琶のおの、一張をたつ。いはゆる折箏・繼琵琶これなり。東にそへて蕨の

日野山  
京都市伏見區

往生要集  
源信僧都の  
著。



觀念



ほどろを敷き、つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣に窓をあけて、こゝに文机を出せり。枕の方にすびつあり。これを柴折りくぶるよすがとす。庵の北に少地をしめて、あばらなる姫垣をかこひて園とす。即ちもろくの薬草をうゑたり。假の庵のありさまかくの如し。

その處のさまをいはば、南に笕あり。岩をたゝみて水をためたり。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。まさきのかづら跡をうづめり。谷しげけれど、西は晴れたり。觀念のたよりなきにしもあらず。春は藤波を見る。紫雲

跡の白浪に

「世の中を何にたとへん朝ぼらけこぎゆく舟のあと」の白浪(拾遺集、満沙彌)

満沙彌

俗名笠朝臣磨、奈良朝時代の歌人、養老年中出家し筑紫觀世音寺別當たり、歿年未詳。

潯陽の江

「潯陽江頭夜送客、楓葉荻花秋瑟瑟。」(白樂天、琵琶行)

源都督

權大納言源經信、歌人、承徳元年歿、年八十二。

の如くして、西の方にほふ。夏は時鳥を聞く。かたらふごとに死出の山路をちぎる。秋はひぐらしの聲耳にみり。うつせみの世を悲しむかと聞ゆ。冬は雪をあはれむ。つもり消ゆるさま、罪障に譬へつべし。もし念佛ものうく、讀經まめならざる時は、みづから休み、みづから怠るに、妨ぐる人もなく、また恥づべき友もなし。殊更に無言をせざれども、ひとり居れば口業ををさめつべし。必ず禁戒をまもるとしもなければども、境界なければ何につけてか破らん。もし跡の白浪に身をよする朝には、岡の屋に行きかふ船をながめて、満沙彌が風情をぬすみ、もし桂の風葉をならす夕べには、潯陽の江を思ひやりて、源都督のながれをならふ。もしあまりの興あれば、しばし松のひびきに秋風の樂をたぐへ、水の音に流泉の曲をあやつる。藝はこれ拙けれども、人の耳を悦ばしめんとにもあらず。ひとり調べ、ひとり詠じて、みづから心を養ふばかり



なり。

また麓に一つの柴の庵あり。すなはちこの山守が居る所なり。かしこに小童あり。時々來たりてあひとぶらふ。もしつれづれなる時は、これを友として遊びありく。彼は十六歳、我は六十、その齡殊の外なれど、心を慰むることはこれ同じ。あるはつばなを抜き、いはなしを採る。又ぬかごを盛り、芹を摘む。あるはすそわの田居にいたりて、落穂を拾ひて穂組をつくる。もし日うらゝかなれば、嶺に攀ぢのぼりて、遙かに故郷の空をのぞみ、木幡山、伏見の里、鳥羽、羽束師を見る。勝地は主なければ、心を慰むるにさはりなし。あゆみ煩ひなく、志遠くいたる時は、これより峰つゞき炭山を越え、笠取を過ぎて、岩間にまうて、石山ををがむ。もしは又粟津の原を分けて、蟬丸の翁が跡をとぶらひ、田上川を渡りて、猿丸大夫が墓を尋ね、歸るさには折につけつゝ、櫻を狩り、紅葉をもとめ、蕨を折り木

勝地は「勝地本来無定主、大都山屬三愛山人。」(白氏文集)

山鳥の

「山鳥のほろほろと鳴く聲きけば父かと思ふ母かと思ふ」(玉葉集、行基峰のかせぎ)

「山深みなるるかせきのけちかきに世に遠ざかる程ぞ知らるゝ」(西行)

の實を拾ひて、且は佛に奉り、且は家づとにす。もし夜靜かなれば、窓の月に古人をしのび、猿の聲に袖をうるほす。叢の螢は遠く眞木の島の篝火にまがひ、曉の雨はおのづから木の葉吹く嵐に似たり。山鳥のほろ／＼と鳴くを聞きて、父か母かと疑ひ、峰のかせぎの近く馴れたるにつけても、世に遠ざかるほどを知る。あるは埋火をかきおこして、老の寢覺の友とす。おそろしき山ならねど、梟の聲をあはれむにつけても、山中の景氣折につけてつくることなし。いはんや深く思ひ、深く知れらん人のためには、これにしも限るべからず。

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、今までに五年を経たり。假の庵もやゝ古屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせり。おのづから事のたよりに都を聞けば、この山に籠りゐて後、やんごとなき人のかくれ給へるもあまた聞ゆ。ま



してその數ならぬたぐひ盡して是を知るべからず。たびくの  
 炎上にほろびたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけ  
 くしておそれなし。ほど狭しといへども、夜臥す床あり、晝居る座  
 あり、一身を宿すに不足なし。寄居蟲はちひさき貝を好む。これ  
 よく身を知るによりてなり。みさごは荒磯に居る。すなはち人  
 をおそるゝが故なり。我またかくの如し。身を知り世を知れ  
 ば、願はず、まじらはず、たゞ靜かなるを望みとし、愁へなきを樂し  
 とす。

「方丈記」

### 三〇 かたみの壺

三年ばかりありて、春の初より、かぐや姫月のおもしろう出でた  
 るを見て、常よりも物思ひたるさまなり。或人の、月の顔見るは忌  
 む事」と制しけれども、ともすれば、人間には月を見て、いみじく泣き

なでふ

うまし

あが佛

給ふ。七月の望の月に出でゐて、せちに物思へる氣色なり。近く  
 使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、かぐや姫例も月をあはれ  
 がり給ひけれども、この頃となりては、たゞ事には侍らざんめり。  
 いみじく思し歎く事あるべし。よくく見奉らせ給へ。といふを  
 聞きて、かぐや姫にいふやう、なでふ心地すれば、かく物を思ひたる  
 さまにて月を見給ふぞ。うましき世に。といふ。かぐや姫、月を見  
 れば、世の中心細くあはれに侍り。なでふ物をか歎き侍るべき。と  
 いふ。かぐや姫のある所に至りて見れば、なほ物思へる氣色なり。  
 これを見て、あが佛、何事を思ひ給ふぞ。思すらむこと何事ぞ。とい  
 へば、思ふ事もなし。物なむ心細く覺ゆる。といへば、翁、月を見給ひ  
 そ。これを見給へば、物思す氣色はあるぞ。といへば、いかでか月を  
 見ずにはあらむ。とて、なほ月出づれば、出でゐつゝ歎き思へり。夕  
 闇には物思はぬ氣色なり。月の程になりぬれば、なほ時々はうち



歎き、泣きなどす。これを、使ふ者ども、なほ物思す事あるべし。」とさ  
さやけど、親を始めて何事とも知らず。  
八月十五日ばかりの月に出でてゐて、かぐや姫いといたく泣き給  
ふ。人目も今はつゝみ給はず泣き給ふ。これを見て親どもも、何  
事ぞ。」と問ひさわぐ。かぐや姫泣く泣くいふ、さきさきも申さむと  
思ひしかども、必ず心惑はし給はむものぞと思ひて、今まですぐし  
侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身  
はこの國の人にもあらず、月の都の人なり。それを昔のちぎりあ  
りけるによりてなむ、この世界にはまうで來りける。今は歸るべ  
きになりければ、この月の望に、かのもとの國より迎へに人々ま  
うで來む。さらす罷りぬべければ、思し歎かむが悲しき事を、こ  
の春より思ひ歎き侍るなり。」といひて、いみじう泣く。翁、こはなで  
ふ事を宣ふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大き

さおはせしを、我が丈たち並ぶまで養ひ奉りたる我が子を、何人か  
迎へきこえむ。まさに許さむや。」といひて、我こそ死なぬ。」とて、泣き  
のゝしることいと堪へ難げなり。かぐや姫のいはく、月の都の人  
にて、父母あり。片時の間とてかの國よりまうで來しかども、かく  
この國には數多の年を経ぬるになむありける。かの國の父母の  
事もおぼえず、ここにはかく久しく遊びきこえてならひ奉れり。  
いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある。されどおのが心  
ならず罷りなむとする。」といひて、もろともにいみじう泣く。使は  
るゝ人々も年比ならひて、たち別れなむ事を、心ばへなどあてやか  
に美しかりつる事を見ならひて、戀しからむ事の堪へ難く、湯水も  
飲まれず、同じ心に歎かしがりけり。

この事を帝聞しめして、竹取が家に御使遣させ給ふ。かの十五  
日、司々に仰せて、勅使には少將高野大國といふ人をさして、六衛の

あてやか



塗籠

つかさ合せて二千人の人を竹取が家に遣す。家に罷りて築地上に千人、屋の上に千人、家の人々と多かりけるに合せて、あける隙もなく守らす。この守る人々も弓箭を帶して居り。母屋の内には、女どもを番にすゑて守らす。嫗、塗籠の内にかぐや姫を抱きて居り。翁も塗籠の戸をさして、戸口に居り。翁のいはく、かばかり守る所に、天の人にもまけむや。といひて、屋の上に居る人々にいはく、つゆも物空にかけらば、ふと射殺し給へ。守る人々のいはく、かばかりして守る所に、蝙蝠一つだにあらば、まづ射殺して外にさらさむと思ひ侍る。といふ。翁これを聞きて、たのもしがり居り。これを聞きて、かぐや姫は、さし籠めて守り戦ふべきしたぐみをしたりと、あゝの國の人をえ戦はぬなり。弓箭して射られじ。かくさし籠めてありとも、かの國の人來なば、皆あきなむとす。相戦はむとすとも、かの國の人來なば、猛き心つかふ人よもあらじ。翁のい

したぐみ

こゝら

ふやう、御迎へに來む人をば、長き爪して眼をつかみつぶさむ。さが髪をとりて、かなぐり落さむ。さが尻をかき出でて、こゝらのおほやけ人に見せて恥見せむ。と腹立ち居り。



竹取物語 (満谷四郎筆)

かゝる程に、宵うち過ぎて子の時ばかりに、家のあたり晝のあかさにも過ぎて光りたり。望月のあかさを十あはせたるばかりにて、ある人の毛の孔さへ見ゆるほどなり。大空より人雲に乗りており來て、地より五尺ばかりあがりたるほどに立ちつらねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、相戦はむ心もなかりけり。辛うじて思ひ起して、弓箭を取りたてむとすれども、手に力も



なくなりて、なえかゝまりたる中に、心さかしき者、念じて射むとすれども、外さまへ行きければ、あれも戦はて、心地ただしれに連れて守りあへり。立てる人どもは、装束のきよらかなることものにも似ず。飛ぶ車一つ具したり。羅蓋らがいさしたり。その中に王と覺しき人、家に「造磨ぞうままうで來」といふに、猛く思ひつる造磨も、物に酔ひたる心地して、うつぶしに伏せり。いはく、汝をさなき人、聊かなる功德を翁つくりけるによりて、汝が助けにとて、片時の程とて降し、を、そこらの年比、そこらの金賜かねたまひて、身をかへたるか如くなりたり。かぐや姫は罪をつくり給へりければ、かく賤しきおのれが許にしばしおはしつるなり。罪の限りはてぬれば、かく迎ふるを、翁は泣きなげく能はぬことなり。はや返し奉れ」といふ。翁答へて申す、かぐや姫を養ひ奉ること二十年餘りになりぬ。片時と宣ふに、怪しくなり侍りぬ。またことどころにかぐや姫と申す人ぞお

そこら

はしますらむ」といふ。「こゝにおはするかぐや姫は、重き病をし給へば、え出でおはしますまじ」と申せば、その返事はなくて、屋の上へ飛ぶ車を寄せて、いざかぐや姫、穢けがき所にかて久しくおはせむ」といふ。立てこめたる所の戸、即ちたゞあきにあきぬ。格子どもも人はなくしてあきぬ。姫抱きてゐたるかぐや姫外に出でぬ。えとゞむまじければ、たゞさし仰ぎて泣き居り。

竹取心惑ひて、泣きふせる所に寄りて、かぐや姫いふ、こゝにも心にもあらでかく罷るに、昇らむをだに見送り給へ」といへども、何しに悲しきに見送り奉らむ。我をばいかにせよとて、棄てては昇り給ふぞ。具してゐておはせぬ」と泣きふせれば、御心まどひぬ。「文を書きおきて罷らむ。戀しからむ折々、とり出でて見給へ」とて、うち泣きて書くことばは、

この國に生れぬるとならば、歎かせ奉らぬ程まで侍るべきを、



侍らで過ぎ別れぬること返すく、本意なくこそ覺え侍れ。脱ぎおく衣をかたみと見給へ。月の出でたらむ夜は見おこせ給へ。見すて奉りて罷る空よりも落ちぬべき心地す。と書きおく。天人の中に持たせたる筈あり。天の羽衣入れり。またあるは不死の薬入れり。ひとりの天人いふ、壺なる御薬奉れ。きたなき所の物きこしめしたれば、御心地悪しからむものぞ。とて持てよりたれば、聊か嘗め給ひて、少しかたみとて、脱ぎおく衣に包まむとすれば、ある天人包ませず。御衣を取出して着せむとす。その時にかぐや姫、しばし待て。といひて、衣着する人は心ことなるものなり。もの一言いひおくべき事あり。といひて文書く。天人おそしと心もとながり給ふ。かぐや姫、もの知らぬことな宣ひそ。とて、いみじく靜かに、おほやけに御文奉り給ふ。あはてぬさまなり。

心もとなし

なめけ

かく數多の人を賜ひて、とゞめさせ給へど、許さぬ迎へまうで來て、とりゐて罷りぬれば、口惜しく悲しき事、宮仕つかうまつらざるなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ずおほしめしつらめども、心づよく承らずなりにし事、なめげなるものにおほしめしとゞめられぬるなむ、心にとまり侍りぬる。

とて、  
いまはとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでぬる

とて、壺の薬そへて、頭中將を呼びよせて奉らす。中將に天人とりて傳ふ。中將とりつれば、ふと天の羽衣着せ奉りつれば、翁をいとほし悲しと思しつる事も失せぬ。この衣着する人は物思ひもなくなりければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。

「竹取物語」



22  
28  
132  
64  
2  
2  
初  
中

新編國文讀本 新制版 卷八終

四學年二組  
大石義見

昭和六年七月二十日印刷  
昭和六年七月二十二日發行  
昭和六年十月二十八日訂正印刷  
昭和六年十月二十九日訂正發行

新編國文讀本新制版
定價 自卷一 各金六拾錢
至卷十

新編國文讀本新制版



編者 千田 憲

發行者 塚田 六彌

印刷者 河合 勝夫

印刷所 東京市本所區既橋一丁目廿七番地ノ二  
凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 右文書院

東京市本鄉區千駄木町  
貳百七拾九番地

電話小石川三七二三番  
振替東京七四五二八番

大賣捌 東京 林平書店・大阪 柳原書店・名古屋 教生社



